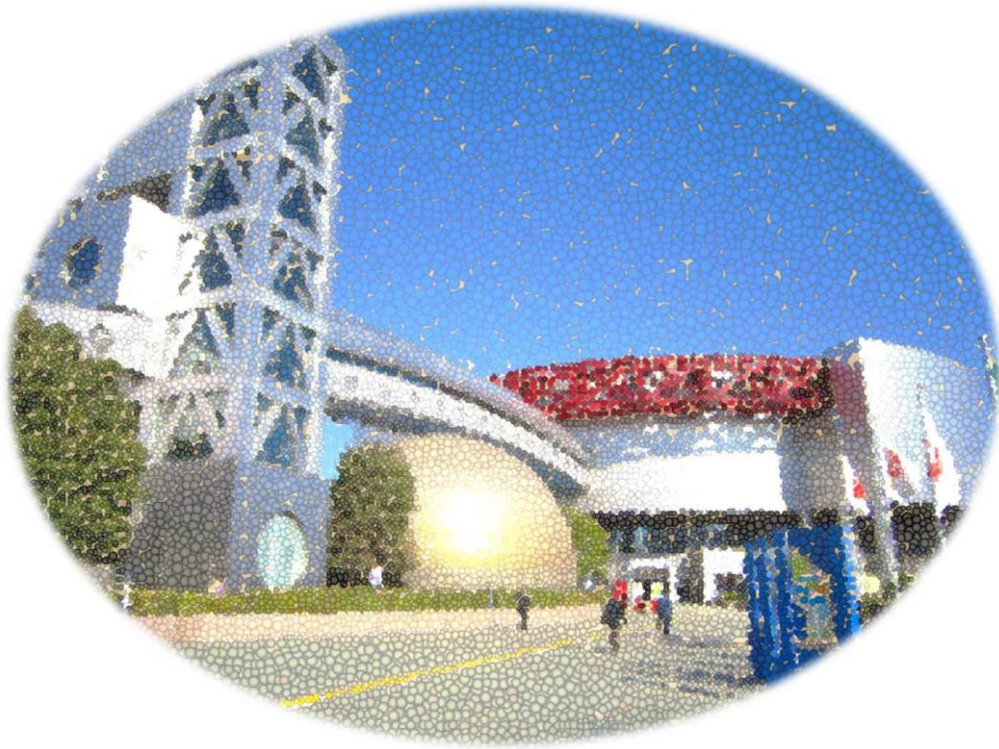


平成 29 年度

英語教育アドヴァンスト研修

## 授業改善プロジェクト 報告書

—アクション・リサーチによる高等学校英語授業の実践—



神奈川県立国際言語文化アカデミア

## はじめに

神奈川県立国際言語文化アカデミア 所長  
大久保 博

昨今、ヒト・モノ・カネ・情報などが国境の垣根を乗り越え、迅速に行き来するグローバル化・ボーダレス化が加速度を高め、その一方で近代以来のいわゆる「国民国家」というシステム・枠組みでは対応できない課題——経済危機、地球環境、民族紛争など——が広がりを見せています。

歴史的・文化的に言わば新たな段階を迎えつつある中、多くの人々が旧来の価値観・アイデンティティの喪失や不透明な将来に戸惑いを見せているとの指摘もあります。

こうしたグローバル社会に対応していくためには、異なる歴史・伝統・文化を持つ世界の人々と、互いの違いを認め合い、また共に関係を結ぶ、「多文化共生」「異文化コミュニケーション」を築いていくことが不可欠であり、新たな社会をたくましく生き抜いていく「グローバル人材」を育てていくことが求められています。

そのために必要なことは何か——様々なことがあるとは思いますが、一つは、コミュニケーションツールとして、事実上の世界共通言語である英語力を高めること、また一つは、自らのアイデンティティを確立し自立的存在として広く物事を見る目を養う、リベラルアーツに代表される古典的教養力を深めることなどを、まずは挙げることができます。

学校におけるグローバル人材の育成に向け、文部科学省でも「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を策定するなど英語教育改革を進めているところですが、当所では、発足当初から「外国語にかかる教員研修事業」の柱として、県教育委員会と連携しつつ、学校や地域で中核的な役割を担う英語教員の人材育成を計画的に行う「英語教育アドヴァンスト研修」を実施しています。

この研修は、本報告書の1ページ以下に記載されているとおり、教員一人ひとりが自己や生徒たちと向き合い、授業改善に向けた課題を調査・発見・整理したうえで、課題解決方策を主体的に設定し、授業を通じて生徒と共にこれを実践していく授業改善プロジェクトであり、さらにその実践結果の検証（課題解決の達成状況、自己や生徒の変化）を自身で行う（振り返る）ものです。研修においては、当所のスタッフが集合研修・授業訪問など継続的な指導・助言を行います。教員自身が研修の主体として積極的にチャレンジしていくこと、授業中に行う研修であること、課題発見から結果検証等一連の流れを論理的に展開すること、生徒との信頼関係を深めながら協力して作業することなどが特徴といえます。

お仕着せでなく、自ら考え、自ら行う、課題解決型の柔軟な研修システムはこれからの社会にふさわしいものです。今後もこの神奈川の地で多くの先生方がチャレンジされることを期待しています。

## 目 次

「英語教育アドヴァンスト研修」とは	1
「教師が変わり，生徒が変わる授業」を目指して－授業改善プロジェクト	3
<b>「聞くこと」にかかわる指導</b>	
継続的なリスニング指導の工夫	5
日常的なリスニング活動の導入	9
<b>「話すこと」にかかわる指導</b>	
ICT を活用したスピーキング指導	13
リテリングによるスピーキング指導	17
入門期のスピーキング指導と練習	21
より英語らしい話し方を身につけさせるスピーキング指導	25
会話を継続させる力と自信を高めるスピーキング指導	29
やり取りする力を伸ばすスピーキング指導	33
基礎的な応答力を育てるスピーキング指導	37
<b>「読むこと」にかかわる指導</b>	
主体的な読解を促すリーディング指導	41
日本語訳に頼らない読解の指導	45
よりの確で深い読みを促す読解指導	49
大学入試レベルの英文を読解する力を伸ばす指導	53
パラグラフリーディングのスキルを育てる読解指導	57
読解タスクとプレリーディング活動の改善	61

\*それぞれの実践レポートの内容については，言語活動の呼称などに関し，厳密な用語の統一はしていません。



## ○ 現状分析と先達の知恵に基づく「改善のための手だて」

外国語の習得には長い年月と地道な努力を必要とします。外国語を教える技術の上達にも長い年月と地道な努力を必要とします。英語教師は日常の生徒指導に加え、自らの英語力の増進と指導技術の上達を同時に行わねばならないので大変ですが、指導の結果、生徒の英語力が高まったと実感できると大きな励みになります。生徒にとっても英語力の伸びを実感することは自己効力感や学習意欲の高まりにつながります。英語力を短期間で劇的に上達させる魔法の指導法にはなかなか巡り会えませんが、一定期間の指導で生徒の英語力の重要な側面を上達させることは可能です。そうした変化を教師と生徒が実感し合い、その積み重ねを通して総合的英語力を育てることが重要だと考えます。

各報告の「改善のための手だて」の欄には、研修参加者が課題の改善に向け、生徒の現状や過去の参加者の実践報告、文献研究等を踏まえて実践した試みが記されています。

- 日常的な場面でのリスニング能力を伸ばすための、英語の音声的特徴についての明示的指導および Pre-reading 活動におけるリスニングの積極的導入。
- 自分の言葉として英語を話す力を伸ばすための、キーワードからのリテリング。
- 自信を持って会話を続ける力を伸ばすための、reactions, fillers, elaboration techniques などの明示的指導と対話活動の継続的実施。
- 概要・要点を把握する力と読みへの積極性を育てるための、オーラルイントロダクションの工夫、授業における概要・要点把握タスクの工夫、読解ストラテジー指導。

改善のための手だては、期待通りの成果をもたらすとは限りません。しかし重要なのは、こうしたプロセスをくり返して改善を継続し、教師が仲間同士協力しながら生徒の能力を伸ばすことです。

## ○ 報告書作成の目的

本報告書の目的は3つあります。第一に、研修参加者が自らの授業改善の軌跡を記述しお互いの情報を共有することで今後の授業改善のための共同体づくりに役立てること。第二に、報告書の内容を他の英語科教員と共有することで、授業改善に関するアイデア創出に資すること。第三に、高等学校英語教育の課題やそれに対する現場の取組状況を公表することで、英語教育や教師教育にかかわる研究者の今後の研究に資することです。

お読みになる際は、以下の本報告書作成・編集方針をご理解いただけるようお願いいたします。

### 授業改善プロジェクト報告書作成・編集方針

1. 授業に参加している生徒の個性や尊厳を尊重し、生徒はみなそれぞれの可能性を持っているとの認識に立つ。
2. 学校や生徒の状況について、読者に参考となる情報を個人情報保護に留意して記述する。
3. 実践報告については、理想論にとらわれず、現状認識に根ざした課題解決の軌跡を記述する。
4. 授業改善のプロセスやストーリーが読者にわかるように記述する。
5. データ処理や分析については、統計処理を含め言語教育研究で用いられる手法を積極的に取り入れ、授業改善の手だての効果を記述する。

本研修の実施および本報告書の作成にあたっては、過去の文献や研究成果、私たち研修担当者自身がお世話になった諸先生方から多くの知見をいただいていることを申し添えます。

## 「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指して一授業改善プロジェクト

### ○ 授業改善プロジェクトの流れ

授業改善プロジェクトは次のような手順で進められます。

#### 1. 自分の授業スタイルの振り返り

授業で行っている個々の活動の目的と効果、活動のつながりをあらためて考えることで、英語教師としての思いと実際の指導方法の整合性を確認します。これにより、自分の授業を客観的に分析するということを体験します。

#### 2. 授業における課題の発見

現在担当している科目の一つについて、どのような課題・問題があるか、教師の思いと授業の実情にどのような食い違いがあるかなどを、思いつく限り挙げてみます。

(例) 英文読解に終始してしまい生徒に自己表現をさせていない。

音読をしっかりとさせたいが声も小さくなかなか盛り上がらない。

#### 3. 改善すべき課題の確定

上で挙げた課題のうち、改善可能で優先順位の高いものを一つまたは二つ選びます。

#### 4. 生徒の現状把握

確定した課題に関連する生徒の学習態度や英語力・技能などを、質的・数量的に調査します。

(質的データの例) 生徒の英語学習に関するコメント、教師による学習観察記録

(数量的データの例) 標準テストの得点、推定語彙サイズ、発話語数

#### 5. 改善目標の設定

授業改善の目的とゴールを、「リサーチ・クエスチョン」および「改善の目安(数値目標)」として明確に言語化します。

#### 6. 目標達成のための手だての決定

目標を達成するために、授業でどのような指導を行うかを決めます。その際、それぞれの指導事項や言語活動にどのような目的や効果があるのかを明らかにしておきます。

(例) 新出語彙の導入に画像や映像を活用すれば、記憶の助けになり語彙の定着がしやすくなるだろう。

#### 7. 生徒の変化の検証と教師自身の振り返り

原則的に事前の現状把握で用いたものと同じ手法で、生徒の変化・向上を検証し、改善目標が達成されたかどうかを調べます。また同時に、この一連の取組を通して「生徒の見方」「授業のデザイン」「教材の扱い方」などについて、教師自身がどのように変化したかを省察します。

#### 8. 報告

同様の課題を抱える教師仲間との情報交換、勤務校や地区での情報提供に役立てるために、レポートを作成します。ここで再度、今回の授業改善の内容・手法を振り返るとともに、今後の課題について考察します(研修最終日に英語による口頭発表も行います)。

## ○ “Teacher as a Researcher” の意識とスキル

「自分が教わったように教える」「目の前の教材をあるがままにこなす」「はやりの言語活動を切り貼りする」というやり方では、うまくいかないことがよくあります。教師の直観や伝統的なやり方にもよさはあるですが、生徒の質的・数量的ニーズを調べ、その客観的データに基づいて、生徒とゴールを共有しながら（変化をともなう）意思決定をしていくという意識やスキルは、プロである教師の成長に不可欠であると考えます。この授業改善プロジェクトに取り組んだ先生方が、仲間を増やししながら、よりよい授業を追求するプロ集団をつくり上げていくことを期待しています。

## ○ これまでの7年間のテーマ分類

この7年間で受講者の先生方が取り組んできた授業改善のテーマを分類すると、次の表のようになります。26年度までは、「動機づけ・学習意欲」やスキルを支える言語知識である「語彙・文法」もテーマとして挙がっていますが、27年度からは、『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標に基づいたスキルの習得を目指す授業実践の必要性を重視し、4技能のいずれかをテーマ（＝授業のゴール）として選択することとしています。

	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度
聞くこと	0	1	0	0	1	1	2
話すこと	2	1	2	7	9	4	7
読むこと	5	4	*1 [ 4	*1 [ 6	11	8	6
書くこと	4	4	3	3	4	2	0
動機づけ・学習意欲	6	3	1	5	—	—	—
語彙・文法	3	1	2	3	—	—	—
計	20	14	13	25	25	15	15

\*1：「技能統合型」

## 継続的なリスニング指導の工夫

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2クラス，合計74名（男30名，女44名）の生徒である。ひとつのことに對して集中力を維持させるのが難しいが，活動が多い授業では意欲的に取り組むことができる。また外国語や外国文化に興味を持っている生徒が多く，英語に対する興味や好奇心は旺盛である。進路は進学9割，就職1割である。進学先の半分以上は専門学校で，4年生大学への進学者は少ない。

### 解決すべき課題

将来の職業として接客業を希望する生徒が多く，授業で簡単な英語によるコミュニケーションスキルを身につけさせたい。また，外国へ旅行したときに困らない程度のリスニング力も生徒のニーズのひとつである。しかし，現状の授業ではコミュニケーションの基礎となるリスニングの指導・練習が不十分である。

### 事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第1回 アンケート：英語に関する意識調査（6月実施：回答者数68）

Q1 英語は将来必要だと思いますか？

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
42人(61.8%)	19人(27.9%)	4人(5.9%)	3人(4.4%)

Q2 英語を使うためには，聞く力は必要だと思いますか？

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
54人(79.4%)	13人(19.1%)	0人(0.0%)	1人(1.5%)

多くの生徒が英語は必要だと感じていることがわかった。また，ほとんどの生徒が英語を使うためには聞く力は必要だと考えていることがわかった。



・第1回 英検3級リスニングテスト（6月実施）

簡単な英語で話される説明やアナウンスを聞いて、内容を正確に聞き取ることのできる力がどれくらいあるのかを把握するために、英検3級の第3部10問を出題した。

受験者数	平均点	最高点	最低点	6割以上正解
60人	5.1点	9点	0点	22人(36.7%)

合格の目安である6割以上正解できた生徒が4割に満たなかった。

### リサーチ・クエスチョン

日常的な場面での英語を聞いて必要な情報を聞き取る力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
- ・英検3級のリスニング第3部で6割以上正解する生徒が全体の7割を超える。
  - ・リスニング力の向上を実感する生徒が全体の7割を超える。

### 改善のための手だて

- 英語のリズムや音変化について明示的な指導を行えば、リスニングに役立つだろう。
  - ・教科書の本文中から1文取り出し、強弱を意識した音読練習をさせる。
  - ・つながる音、消える音について指導する。
- まとまった英文を聞いて概要をつかむ練習をくり返せば、リスニングに対する苦手意識が減り、リスニング能力の向上を実感できるようになるだろう。
  - ・Pre-readingで教科書英文の音声を聞いてキーワードを聞き取る練習をする。
  - ・Pre-readingで教科書英文の内容を問う簡単な問題に答えさせる。
- 定期的にはリスニングの演習問題に取り組ませれば、自らの課題や達成度を確認でき、向上への意欲が高まるだろう。
  - ・英検、GTECなどの問題を使ったリスニング練習を2週間に1度のペースで実施する。
  - ・聞き取れなかったものについて、その理由を振り返らせる。

## 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回 アンケート：英語に関する意識調査（12月実施：回答者数 59）

Q1 リスニングの力は伸びたと思いますか？

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
19人(32.2%)	18人(30.5%)	17人(28.8%)	5人(8.5%)

Q2 リスニングの勉強は今後も必要だと思いますか？

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
34人(57.6%)	21人(35.6%)	2人(3.4%)	2人(3.4%)

リスニングの力が伸びたと「(どちらかといえば)思う」と答えた生徒は63%となり、目標の7割には到達しなかったものの、半数以上の生徒の実感につながったことから効果はあったといえるだろう。また生徒から授業後に「キーワードの聞き取りのコツが掴めた気がする」「集中して英語を聞けるようになった」といったコメントがあったことから、伸びを実感する生徒は多かったと考える。最初は本文全文を集中して聞くことは難しかったが、12月にはほとんどの生徒が集中して聞くことができおり、それも大きな成長である。

「もっとリスニングをやりたいです」というコメントを生徒からもらえたことはうれしかった。新しく取り入れた活動はペアで行うものが多かったこともあってか、ほとんどの活動を生徒は楽しんで取り組むことができた。半年の取組でリスニングの必要性を感じる生徒が90%を越えたことは大きな成果であったと考える。

- ・第2回 英検3級リスニングテスト（12月実施） \*6月との比較

	受験者数	平均点	最高点	最低点	6割以上正解
6月	60人	5.1点	9点	0点	22人(36.7%)
12月	60人	5.5点	10点	0点	31人(51.7%)

こちらも目標の7割には届かなかったものの、6割以上正解できた生徒が半数を超えた。また6月の結果と比較すると平均点が5.1から5.5上がっており、この2回のデータについてt検定を行ったところ有意差が見られた。 $(p = 0.04 < 0.05)$ 。これは大変うれしい成長である。

## 教師の変化

- ・生徒を信頼して、さまざまな新しい活動を導入するようになった。リスニングのすべての活動を通して、想像していた以上に生徒が一生懸命取り組んでくれたことから、教師が熱意をもって指導をすれば生徒は応えてくれるということをあらためて感じた。その気づきから、何でも前向きに生徒と挑戦してみるようになった。

- ・目的、目標をつねに意識するようになった。活動の目的、長期的な目標を念頭に授業をするようになったことで、生徒への声かけが効果的にできるようになったと感じる。アンケートやデータによって生徒のニーズを知り、一緒に課題の改善に取り組むことで、生徒との信頼関係を深めることができたように思う。

### **今後の課題（次の改善点など）**

- ・練習問題のあとで聞き取れなかった理由を振り返らせたが、個別の解決策の指導に十分生かすことができなかつたため、リスニングストラテジーを研究し、適切な支援ができるようにしたい。
- ・授業で学習したことを着実に身につけさせるための効果的な家庭学習課題を工夫する必要がある。

### **まとめ・感想**

今回研修に参加し、自分の授業を見つめ直すことができた。いろいろな先生方に助言をいただいて授業の目的・目標をあらためて意識し、今までの自分の授業スタイルを大きく変えることができた。納得して授業を行うことで教材の準備もより楽しくなり、生徒の反応もより素直に受け取れるようになった。生徒からのポジティブなコメントも増え、授業改善が生徒との信頼関係を築くことにもつながったと感じる。生徒のニーズを把握したうえで、生徒にこうなってほしいという教師の願いや具体的なゴールを示せば、3年生になって急に新しい活動を取り入れても生徒はきちんとついてきてくれることがわかった。これはとてもうれしい経験であった。今回この機会を与えてくれた校長先生、そしてアカデミアの先生方に感謝の気持ちを申し上げたい。今後も自己研さんを積み、生徒とともによりよい授業を作っていきたい。

### **授業改善にあたって参考にした資料等**

田尻悟郎.(2014).『田尻悟郎の英語教科書本文活用術！』教育出版

## 日常的なリスニング活動の導入

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2クラス，合計50名（男子24名，女子26名）の生徒である。投げかけた質問に対して，自発的に答えようとしめない雰囲気がある。生徒の大半は日常的な学習の習慣が身につけておらず，テスト前にのみ勉強する傾向にある。しかしほぼ全員，勉強の必要性は感じており，大学への進学を希望している生徒が7割である。

### 解決すべき課題

ALTによる授業中の指示が「聞き取れない」という生徒が多くいる。英語を実際に使って会話をする際に必要となる，要点や概要を聞き取る力を身につけさせたい。

### 事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第1回 リスニングテスト 英検3級『2部』（7月実施：受験者数50）

簡単な英語で話されるまとまりのある文章を聞いて，内容を的確に聞き取る力がどれくらい身につけているのかを調べるために，英検3級のリスニング問題(大問2)10問を出題した。1問1点とした平均点は7.5点であった。英検3級合格の目安となる6割以上正解した生徒は46人で，全体の92%であった。この結果から，問題が易しすぎたと判断した。

受験者数	平均点	標準偏差	最高点	最低点	6割以上正解
50人	7.5点	1.69	10点	1点	46人(92%)

#### \*テスト後のアンケート

リスニングテストのときに苦労したことは何ですか？（1つ選択）

知らない語句があったこと	音声のスピードが速かったこと	質問の内容がわからなかったこと	会話の内容がわからなかったこと
16人(32%)	14人(28%)	1人(2%)	8人(16%)
文法がわからなかったこと	集中できなかったこと	その他	
3人(6%)	6人(12%)	2人(4%)	

英語を聞く力は必要だと思いますか？

必要だと思う	どちらかといえば必要だと思う	どちらかといえば必要だと思わない	必要だと思わない
31人(62%)	18人(36%)	1人(2%)	0人(0%)

先生の話す英語（指示や質問など）はどれくらい理解できていると思いますか？

ほぼ理解できている	まあまあ 理解できている	あまり 理解できていない	ほとんど 理解できていない
1人 (2%)	28人 (56%)	19人 (38%)	2人 (4%)

テストの結果はよかったものの、苦勞したこととして、「知らない語句があったこと」「音声のスピードが速かったこと」を挙げた生徒が多かった。「英語を聞く力は必要だと思いますか」という問いには、98%の生徒が「必要だと思う」「どちらかといえば必要だと思う」と回答した。しかし、教師の話す英語を「あまり／ほとんど理解できていない」生徒が4割以上いることがわかった。

この結果から、英語の音声に慣れさせながら、未知語があってもそれにとらわれずに大まかな内容や大事な情報を聞き取る力を身につけさせるための指導が必要であると考えた。

・第2回リスニングテスト 英検準2級『2部』（9月実施：受験者数 50）

あらためて英検準2級のリスニング問題(大問2)10問を使って再調査した。1問1点とした平均点は6.0点であった。6割以上正解した生徒は31人で全体の62%であった。

受験者数	平均点	標準偏差	最高点	最低点	6割以上正解
50人	6.0点	1.71	9点	2点	31人 (62%)

### リサーチ・クエスチョン

まとまりのある英語を聞いて、要点や概要を聞き取る力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：

- ・英検準2級『2部』のリスニングテストで6割正解する生徒が全体の7割を超える。
- ・アンケートで「教師の話す英語が理解できている」と回答する生徒が全体の8割以上になる。

### 改善のための手だて

- 概要を聞き取るリスニング活動を日常的に行えば、未知語にとらわれずに大まかな内容を聞き取ることに慣れるだろう。
  - ・教科書英文のプレリーディング活動として、パッセージ全体またはパラグラフごとの概要を問うタスクを与える。
- 発音、リズム、音変化について明示的に指導すれば、英語の音声の特徴がわかることで、スピードにも慣れるだろう。
  - ・リンキングなどの音変化を含む教科書英文のディクテーションを行う。
  - ・教科書英文の強く読まれる語句に印をつけさせる。
  - ・違いが聞き取りにくい発音 (/l/,/r/, /s/,/θ/など) についてゲームを通して学習させる。
  - ・日本語など他の音に聞こえる歌の歌詞を聞かせ、本当の歌詞（英語）を当てさせる。

- 身近な話題に関するリスニング教材や易しい情報検索のタスクを与えれば、概要や要点を聞き取る力が身につくだろう。
- ・最近のニュースなどを聞いてトピックを答えさせる。
  - ・数字や時刻など聞き取るリスニングタスクに取り組みさせる。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第3回 リスニングテスト 英検準2級『2部』（12月実施：受験者数 50）

再度、7月と同様のテストを行い、それぞれの結果を比較した。

	人数	平均	標準偏差	最大値	最小値	6割以上正解
第2回	50	6.0点	1.71	9点	2点	31人(62%)
第3回	50	5.6点	2.03	10点	1点	26人(52%)

平均点は0.4点減少し、6割以上の正解者も10%減ってしまい、目標を達成することができなかった。期末試験直後の実施で気が抜けてしまっていた生徒が多かったことも考えられるが、短期間の取組で、指導・練習が十分なスキルアップにつながり切れなかったのかもしれない。

#### \*テスト後のアンケート

リスニングテストのときに苦勞したことは何ですか？（1つ選択）

知らない語句があったこと	音声のスピードが速かったこと	質問の内容がわからなかったこと	会話の内容がわからなかったこと
16人(32%)	11人(22%)	2人(4%)	13人(26%)
文法がわからなかったこと	集中できなかったこと	その他	
5人(10%)	2人(4%)	1人(2%)	

英語を聞く力は必要だと思いますか？

必要だと思う	どちらかといえば必要だと思う	どちらかといえば必要だと思わない	必要だと思わない
33人(66%)	15人(30%)	1人(2%)	1人(2%)

先生の話す英語（指示や質問など）はどれくらい理解できていると思いますか？

ほぼ理解できている	まあまあ理解できている	あまり理解できていない	ほとんど理解できていない
1人(2%)	33人(66%)	13人(28%)	3人(6%)

リスニングテストで苦勞したことについては、前回のテストとレベルが異なるので単純な比較はできないが、語彙知識の不足を挙げた生徒は同じ32%でもっとも多く、「音声のスピードが速かったこと」を挙げた生徒はわずかに減り、「会話の内容がわからなかった」という生徒が大幅に増加した。ほとんどの生徒が聞く力が必要であると認めており、そのニーズに応えるために、今後もさらに工夫を加えたリスニング指導を継続しなければならないとあらためて感じた。教師の話す英語を「理解できている」と答えた生徒が増えてきているのはよい傾向であると思う。授業中のsmall talkや意味のあるやり取りを積極的に行い、生徒が興味を持って英語を聞く必要性を作り出すようにしていきたい。

## **教師の変化**

授業における指導や活動の内容の目的や目標を、今までよりも明確に意識することができるようになった。改善のための手だてを授業に取り入れるためには、授業の流れを大きく変える必要があったが、目的や目標が明確でない活動を整理するきっかけになった。また、授業の流れを変えることで不安感や違和感を持つ生徒もいたが、何のためにこの活動をするか、この練習はどのような力を伸ばすためにやっているのか、などを説明することで、教師、生徒ともに納得して授業の方針を共有することができた。

新しい活動を取り入れるなかで、一番苦労したのは難易度である。「できないこと」をやりたい生徒はいない。新しい活動を「できそうだ」と生徒に思ってもらうのに苦心した。スモールステップを設定した授業の構成を考える大切さを実感した。

## **今後の課題（次の改善点など）**

生徒は、英語の音変化には少しずつ慣れてきている。今回のアクション・リサーチの手だての1つとして、リンキングが起こっている箇所を聞き取るディクテーション活動をたびたび実施したが、事後に行ったアンケートで「英語の音の特徴がわかって、聞き取れるようになってきた」という感想を書いた生徒もいた。12月に実施したアンケートで、「スピードについていけなかった」という生徒が減少したことからも、英語の音声自体には慣れてきたように感じている。

しかし、聞き取れた情報からメインアイデアやメッセージを推測することについては、苦手とする生徒が多くいる。概要・要点を聞き取るリスニング活動は引き続き行っていく必要がある。リスニングでは、文法・語彙知識が聞き取った情報を補完する重要な働きをするため、ディクテーションの活動なども、新出文法・語彙指導と融合させながらより計画的に実施したい。

## **まとめ・感想**

客観的なデータから生徒のニーズを把握できたことは、授業づくりをする際にとても役立った。ほとんどの生徒が学ぶことの必要性を十分に感じていることには、正直なところ、驚きであった。授業中の印象だけではわからないこともあることを実感した。

改善のための手だての効果が今回のリスニングテストでは確認できなかったことに関しては残念であるが、リスニングスキルは短期間にはなかなか向上しないということ、音声についての知識と練習機会を与えるだけで不十分であるということがあらためてわかった。「どのように聞いたらよいか」というストラテジーの指導が足りていなかったと反省している。今回の英語教師としての学びを踏まえて、今後の指導計画を考えていくことが何よりも大切である。目標を明確にし、「楽しく」「やる気になる」「頑張ればやれそう」しっかりとしたタスク設定をして、適切な指導方法を考えながら、辛抱強く、生徒とともによりよい授業を行っていききたい。

## **授業改善にあたって参考にした資料等**

Rost, M. and Wilson, J.J. (2013). *Active Listening*. Pearson Education Ltd.  
門田修平他(編著). (2010). 『英語リーディング指導ハンドブック』大修館書店

## ICT を活用したスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	----------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は1年生2クラス、計79名（男子41、女子38）の生徒である。英語は好きだが不得手と考えている生徒が多く、集中して取り組むべき課題では最後まで集中力が持続しない。中学校の学習内容を概ね理解している生徒もいるが、全体的に基礎的な言語知識が定着しているとは言いがたく、家庭学習の習慣もほとんど身につけていない。ほぼすべての生徒が大学・短大・専門学校への進学を希望しており、そのうち約4割がAO入試や指定校・公募制推薦入試によるものである。

### 解決すべき課題

- ・人前で英語を話すことに抵抗がある生徒が多く、間違えることを恐れるせいか、大きな声で発表することが難しい。
- ・「あー」「えー」などの filled pauses の時間が長く、与えられた時間内の発話語数が少ない。
- ・自信のなさからか、発表態度に真剣さを欠く生徒が数名いる。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・事前アンケート（7月上旬実施：回答者数79）

1. あなたは英語の学習が好きですか、嫌いですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
18人 (22.8%)	23人 (29.1%)	25人 (31.6%)	13人 (16.5%)

2. 英語を話す力は必要だと思いますか。

思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば思わない	思わない
60人 (75.9%)	17人 (21.5%)	2人 (2.5%)	0人 (0.0%)

3. この授業でどのような力や知識を伸ばしたいと思いますか。（2つまで選択可）

英語を聞く力	英語を話す力	英語を読む力	英語を書く力
29人 (36.7%)	63人 (79.4%)	19人 (24.1%)	22人 (27.8%)

4. 英語に限らず、自分は何かを話すことが得意だと思いますか。

思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば思わない	思わない
5人 (6.3%)	22人 (27.8%)	25人 (31.6%)	27人 (34.2%)

5. インターネットに接続できる機器を持っていますか。（持っているものすべてを選択）

スマートフォン	タブレット	パソコン	持っていない
75人 (94.9%)	25人 (31.6%)	42人 (53.2%)	1人 (1.3%)

英語が嫌いな生徒が約半数いるものの、ほとんどの生徒が英語を話す力が必要で、授業で伸ばした



いと思っっていることがわかった。ただし、人前で何かを話すことに抵抗を感じる生徒が約 6 割にのぼることから、インターネットを活用して自宅で練習できるような環境を整えたいと考えた。接続機器のない生徒については、タブレット端末を貸し出し、放課後静かな教室でタスクに取り組ませた。

・第 1 回スピーキングテスト（8 月下旬実施，即興型）

①スピーキング課題： What is your favorite ○○? Why?

（○○： animal, food, color, place, character, music から 1 つをランダムに出題）

②評価方法

	声の大きさ・明瞭さ	英語らしい話し方	30 秒間での発語数
A (3 点)	大きな声ではっきりと発音している。	英語らしい発音・アクセント，イントネーションで話している。	36 語以上発している。
B (2 点)	十分に聞き取れる声で話している。	英語らしい発音を意識して話しているが一部誤りがある。	23 語～35 語程度発している。
C (1 点)	声が小さい・不明瞭であるなど，聞き取れない部分がある。	英語らしい発音になっていない。	22 語以下しか発していない。

※発語数の基準については、全体の平均発語数が 22.3 語で上位 10 人の平均が 35.6 語だったことから、上のように設定し、今後に向けて努力を促すこととした。

③結果

	声の大きさ・明瞭さ	英語らしい発音	30 秒間での発語数
A	4 人 (5.2%)	1 人 (1.3%)	5 人 (6.5%)
B	57 人 (74.0%)	53 人 (68.8%)	28 人 (36.4%)
C	16 人 (20.8%)	23 人 (29.9%)	44 人 (57.1%)

ほぼ 8 割の生徒が十分に聞き取れる声で話していることがわかったが、そのなかで、大きな声ではっきりと話している生徒はまだわずかであった。英語らしい発音に関しては、ほぼ全員が A に到達していないことがわかった。（唯一 A 評価だった生徒は帰国子女の生徒であった。）発語数では、A 評価の生徒の平均値でも 1 分間換算で 100 語に至らず、流暢さの訓練が必要であることを再認識した。

**リサーチ・クエスチョン**

身近な話題について自信を持って話すことができるようにするにはどのような指導をすればよいか。  
改善の目安：評価ルーブリックのそれぞれの項目で、B 以上となる生徒が全体の 8 割を超える。

**改善のための手だて**

- 毎回の授業で英語を話す活動を行えば、話すことに慣れ、抵抗感が軽減するだろう。
  - ・“Think in threes”（トピックに関する意見や考えを 3 つ，理由とともに相手に伝える活動）を授業の始めに行う。
  - ・ペアを変えながら，なるべく多くの相手と会話させるようにする。
  - ・さまざまな会話のフレームを板書し，場面に合った表現を練習させる。
- 家庭学習課題として ICT を活用したスピーキングの機会を与えて発話をモニターさせれば，英語を話すことに興味を持つとともに，弱点を認識し，より英語らしい話し方ができるようになるだろう。

- ・教育用課題提出添削アプリケーション「Showbie」を活用して音声データを提出させる。
- ・提出の前後に自分の発話を確認させることで、スピーキングの練習，振り返りを促す。
- ・個別にフィードバックを与える。

## 生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

### ・生徒の取組状況

\*Think in Threes のペア活動では，当初 1 分間話し続けることが難しい生徒がほとんどだったが，「辞書タイム（1 分間の辞書使用）」の導入によって，語彙数が飛躍的に上がったように感じた。

\*Think in Threes の際に，姿勢・ジェスチャー・アイコンタクトなど，非言語的な部分についても指導することによって，生徒たちが話すことに抵抗がなくなってきたように思えた。

\*Showbie のさまざまな課題について，生徒それぞれのよい点や改善点について個別にフィードバックすることによって，何度も積極的にやり直しに取り組む生徒が見受けられた。

\*以前より授業中の英語による指示に対する反応がよくなり，スピーキング力があがるにつれて，リスニング力もあがったように感じられる。

### ・第 2 回スピーキングテスト（1 2 月中旬実施）

第 1 回と同様の課題，評価規準で行った。

結果 \*（ ）内は%

	声の大きさ・明瞭さ		英語らしい発音		30 秒間での発語数	
	第 1 回	第 2 回	第 1 回	第 2 回	第 1 回	第 2 回
A	4 人( 5.2)	36 人(46.8)	1 人( 1.3)	26 人(33.8)	5 人( 6.5)	10 人(13.0)
B	57 人(74.0)	41 人(53.2)	53 人(68.8)	50 人(64.9)	28 人(36.4)	52 人(67.5)
C	16 人(20.8)	0 人( 0.0)	23 人(29.9)	1 人( 1.3)	44 人(57.1)	15 人(19.5)

### ・事後アンケート（1 2 月中旬実施：回答者数 77）

1. 活動を行う前の自分と比べて，自分の「英語を話す力」が伸びたと思いますか。

思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば思わない	思わない
22 人 (28.6%)	43 人 (55.8%)	10 人 (13.0%)	2 人 ( 2.6%)

2. 活動を行う前の自分と比べて，英語を話すことに対する抵抗感は減りましたか。

減った	どちらかといえば減った	どちらかといえば増えた	増えた
10 人 (13.0%)	60 人 (77.9%)	6 人 ( 7.8%)	1 人 ( 1.3%)

3. Think in Threes について，「英語を話す力」を伸ばすために役に立ったと思いますか。

思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば思わない	思わない
42 人 (54.5%)	31 人 (40.3%)	3 人 ( 3.9%)	1 人 ( 1.3%)

4. Showbie の課題提出前に自分の録音した声を聞きなおしていましたか。

毎回聞きなおしていた	ほぼ聞きなおしていた	ほぼ聞きなおしていない	聞きなおしていない
25 人 (32.5%)	30 人 (39.0%)	14 人 (18.2%)	8 人 (10.4%)

[聞きなおした理由]

自分の発音を聞きなおして，苦手なところがわかるから。／間違いがあつたらまずいから。  
／声の大きさ，切るところ，相手にわかりやすいかなどを確認したかったから。

[聞きなおさなかった理由]

自分の声を聞きたくなかったから。／再録音が面倒だったから。

5. Showbie は「英語を話す力」を伸ばすために役に立ったと思いますか。

思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば思わない	思わない
22 人 (28.6%)	39 人 (50.6%)	11 人 (14.3%)	5 人 (6.5%)

第2回テストのすべての項目で B 以上となる生徒が目標の 8 割を超えたことから、毎授業の活動の継続が成果につながったと思う。2 回のルーブリック評価の全項目で統計学的に有意な向上が認められ (Wilcoxon の符号付順位検定:  $p = 0.00 < 0.05$ ), 発語数の数値データについても同様に有意差が認められた ( $t$  検定:  $p = 0.00 < 0.05$ )。またアンケートでは、ほとんどの生徒が Think in Three および Showbie の効果を認めていることがわかった。特に Showbie については、7 割以上の生徒が自分の声を聞きなおして向上に役立っていることがわかった。さらに 8 割を超える生徒が「英語を話す力が伸びた」とし、9 割以上が「抵抗感が減った」と感じていることはとても喜ばしいことである。

### **教師の変化**

- ・試験範囲をカバーすることに躍起になってないがしろにしてきた、スピーキング練習の積み重ねの大切さを再認識できた。
- ・毎授業、教科書とは直接関係のない身近な話題について生徒たちと英語でやり取りをする時間が増えたことで、自分自身のスピーキングスキル向上への意欲にもつながった。

### **今後の課題 (次の改善点など)**

- ・ほとんどの生徒が能力の向上を実感しているのに対して、結果が出ない、実感できない生徒が一定数いるので、そのような生徒たちの指導方法についても検討が必要である。
- ・毎授業、発語数を増やすためにペア活動のみを行ってきたが、グループ活動やもう少し人数が多い単位での学習活動の機会を設けてみたい。
- ・Showbie の操作方法やトラブル対処法などについて、理解を徹底する必要がある。
- ・自分の音声を聞き直すことの必要性を十分理解させ、その時間確保についても具体的に指導したい。

### **まとめ・感想**

これまでは、とにかく試験範囲を終わらせて、高得点を取らせるということを考えて授業をしてきた。しかし、今回の授業改善にあたり、スピーキング指導が不十分であったことを再認識し、同僚の協力を得て一連の活動を行ってきた。生徒は手応えを感じながら次の課題を心待ちにし、それまで見たことがないような生き生きとした姿を見せてくれている。わずか 4 か月間の取組となってしまったが、私自身の考え方を大きく変えるには十分だった。このような機会を与えてくださったアカデミアの先生方、推薦してくださった校長先生、また終始心の折れやすい私を支えてくれた他の受講者の先生方に、この場を借りて心から感謝を申し上げたい。

### **授業改善にあたって参考にした資料等**

Showbie (教育用アプリケーション) <https://www.showbie.com/>

## リテリングによるスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	---------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は1学年2クラス79名（男子44名、女子35名）の生徒である。ほとんど全員が4年制大学への進学を希望している。学習意欲が高い生徒が多く、基礎的な知識はしっかりと定着している。スピーキング力の必要性を感じながらも、英語を話す場面になると、自信のなさからか、相手の様子をうかがいながら恐る恐る英語を話す生徒や、目を見ながら話せない生徒が多く見られる。

### 解決すべき課題

- ・音声で表現する活動が音読のみであり、生徒が自分のことばで英語を話す機会がほとんどない。
- ・自分の英語が相手に伝わったという成功体験を与えるような、英語による発表活動が少ない。
- ・自信を持って相手の目を見て話すための指導や練習ができていない。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回英語を話すことに関するアンケート（6月実施：回答数 79）  
生徒のスピーキングに対する興味関心および自信等について意識調査をした。

1. あなたは英語を話すことに自信がありますか。

ある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	ない
0人 (0.0%)	17人 (21.5%)	27人 (34.2%)	35人 (44.3%)

2. あなたは英語を話すのが好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
20人 (25.3%)	35人 (44.3%)	18人 (22.8%)	6人 (7.6%)

予想通り、英語を話すことが好きだという生徒が多い。しかし、78.5% (62人)の生徒は英語を話すことに自信がないと答えている。これは自分の話す英語が相手に伝わったり、誰かにほめられたりするなど、自信を持つきっかけとなる体験が乏しいことに起因していると考えられる。

- ・第1回スピーキングテスト（7月実施：受験者数 79 \*うち評価対象者数 40）

テスト内容：教科書本文のリテリング（事前に解答例を提示）

本文に関する Q&A および意見発表

評価方法：自作ルーブリックによる分析的評価

1. アイコンタクトができていますか

しっかりできています	時々できています	まったくできていない
26人 (65.0%)	12人 (30.0%)	2人 (5.0%)

## 2. 自分のことばで本文のリテリングができているか

自分のことばで説明している	一部の表現以外は教科書と同じ表現	一字一句教科書と同じ表現
12人 (30.0%)	23人 (57.5%)	5人 (12.5%)

受験者の半数については、別の担当者が学年統一の別スケールを使って同時進行で評価を行ったため、自作ループリックによる評価対象者は40名となっている。アイコンタクトは概ねできているが、リテリングについては、70.0% (28人)の生徒が暗記してきた本文をほぼそのまま話していた。なかには、解答例を丸暗記してきたが、単語を1つ思い出せず、その後何も話せなくなる生徒もいた。

### リサーチ・クエスチョン

情報を自分のことばで、自信を持って、口頭で伝えられる力を身につけさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：

- ・英文内容のリテリングにおいて、自分のことばで情報を伝えられる生徒が全体の7割以上になる。
- ・「英語を話すことに自信がある」と感じる生徒が全体の7割以上になる。

### 改善のための手だて

- 流暢さを重視したスピーキング活動を継続すれば、英語を話すことに慣れ、自信を持つようになるだろう。
  - ・毎回授業内で、身近なトピックに関して、途切れずに3分間相手に話し続ける活動を行う。
  - ・Filler (つなぎことば) や聞き手による質問によって、会話を継続させるよう指導する。
- キーワードなどを使ったリテリング活動を継続すれば、即興的に自分のことばで情報を伝える力が身につくだろう。
  - ・与えられたキーワードから教科書英文のリテリングをさせる。
  - ・グラフィックオーガナイザーをもとに教科書英文のリテリングをさせる。
- 英語によるモデルプレゼンテーションを視聴させれば、さまざまな生きた英語表現や非言語表現の学習機会を与えることができるだろう。
  - ・家庭学習課題として、インターネット上のTED動画を見て、そこから学んだ英語表現やモデルプレゼンターの非言語表現の工夫を記録させる。

### 生徒の変化 (途中経過, 事後の検証結果など)

- ・スピーキング活動における「流暢さ」の推移 (対象者数 79)

毎回授業内でペアになり、与えられたトピックに関して相手に向かって話し続け、5秒以上沈黙してしまうまでに話せた時間の長さを計測させた (最長3分)。そして、活動の前期と後期における各生徒の平均時間について比較分析を行った。

	全体の平均	標準偏差	最長平均	最短平均	平均120秒以上話せた生徒
9月29日～10月11日	127.8秒	32.26	180秒	57秒	60.8%
10月17日～11月10日	148.2秒	28.94	180秒	74秒	84.8%

短期間ではあるが、確実に英語を話すことに慣れてきていることがわかる。各生徒のデータについて  $t$  検定を行ったところ、統計学的に有意な向上が認められた ( $p=0.00<0.05$ )。活動後のアンケートからは「伝わる英語を話し続けることができるようになったので本当によかった」「話せると楽しいと思うようになった」というように英語を話すことに喜びを感じている様子や、「いろんな副詞を使い分けるようになった」「もっと単語を勉強したい」と語彙学習に対する意識の向上がうかがえた。

・第2回英語を話すことに関するアンケート（12月実施：回答数 79）

1. あなたは英語を話すことに自信がありますか。

	ある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	ない
7月	0人 (0%)	17人 (21.5%)	27人 (34.2%)	35人 (44.3%)
12月	3人 (3.8%)	51人 (64.6%)	20人 (25.3%)	5人 (6.3%)

2. あなたは英語を話すのが好きですか。

	好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
7月	20人 (25.3%)	35人 (44.3%)	18人 (22.8%)	6人 (7.6%)
12月	19人 (24.1%)	31人 (39.2%)	21人 (26.6%)	8人 (10.1%)

英語を話すことに「自信がある」という生徒が大幅に増加した。改善策にある程度の効果があったと言ってよいだろう。一方で「英語を話すのが好き」だという生徒はわずかに減少した。「嫌い」の理由として「言いたいことがうまく伝えられずもどかしいから」「文法や単語が出てこなくてイライラするから」などが挙がっていた。話す機会が増えたことで、できないことに気づき、ストレスを感じる生徒がでてきたものと考えられる。

3. TED動画を観たことで英語を話すことに役に立ちましたか。

	役に立った	どちらかといえば役にたった	どちらかといえば役に立たなかった	役に立たなかった
12月	5人 (6.3%)	32人 (40.5%)	36人 (45.6%)	6人 (7.6%)

「役に立った」と答えた生徒は46.8%(37人)であった。理由としては「人を引きつける工夫のしかたを知った」「学んだ表現をスピーキング活動で使えた」などが挙げられ、活動の意義を再認識できた。しかし、半数を超える生徒が「役に立たなかった」とし、その理由としては「内容が難しすぎて字幕に集中してしまう」という意見が多かった。すべての生徒が積極的に取り組み、スピーキングに役立てることができるように、視聴のポイントやタスクをより明確にする必要があると感じた。

・第2回スピーキングテスト（12月実施：受験者数 80 \*うち評価対象者数 40：第1回と同じ）

テスト内容：教科書本文のリテリング（事前に解答例は提示しない）

意見発表およびそれに対する追加質問への応答

評価方法：自作ループリックによる分析的評価

1. アイコンタクトができているか

	しっかりできている	時々できている	まったくできていない
7月	26人 (65.0%)	12人 (30.0%)	2人 (5.0%)
12月	38人 (95.0%)	2人 (5.0%)	0人 (0%)

## 2. 自分のことばで本文のリテリングができているか

	自分のことばで説明している	一部の表現以外は教科書と同じ表現	一字一句教科書と同じ表現
7月	12人 (30.0%)	23人 (57.5%)	5人 (12.5%)
12月	36人 (90.0%)	3人 (7.5%)	1人 (2.5%)

ほとんどの生徒がしっかりとアイコンタクトをしながら、独自の表現を使ってリテリングができるようになった。さらに、本文と異なる論理展開で説明をしたり、異なる文法や文構造を用いて説明をしたりする生徒も多かった。2つの項目の2回の評価結果をそれぞれ検定 (Wilcoxon の符号付順位検定) にかけたところ、どちらにも有意な向上が認められた ( $p = 0.00 < 0.05$ )。

### **教師の変化**

今回のアクション・リサーチを通して、授業の目標や活動の目的を明確に意識するようになった。しかし、学習意欲を高めることを目的にして行った活動が必ずしも生徒を英語好きにするとは限らないという経験もした。教師側の一方的な思い込みによる指導にならぬよう、こまめに生徒からフィードバックを得るなどし、生徒と一緒に授業を作り上げていくという姿勢も持つようになった。

### **今後の課題 (次の改善点など)**

担当者間で一致した指導を行っていくことが必要である。効果的な指導・活動も、定期テストに反映されなければ生徒の学習意欲は維持できない。まずは定期テストや評価方法に関する議論から、一致した指導体制づくりを進めたいと思う。また、今回新たに行った活動は、少し難易度が高すぎたと感じられたことから、今後は、生徒の英語力の現状をよりの確に判断し、生徒が達成感を感じられるような適切な目標設定に基づく授業を行うことで、知識・スキルだけでなく、学習意欲の向上も目指したいと思う。

### **まとめ・感想**

本研究により、目標設定に基づいた授業デザイン、授業改善の方法を学び、実践することができた。その結果、より深く教材研究を行うようになった。また、研修のなかで多くのすばらしい指導法を学ぶことができ、この1年で自分の教科指導の幅が大きく広がったことを実感している。難しすぎる課題に戸惑う生徒の姿に自信を失うこともあった。しかしそのたびに、講師の方々や勤務校の同僚からの温かい声に支えられた。今では初心に戻り、教えることを楽しみ、生徒の笑顔があふれる英語の授業を展開することを第一に考えている。今後も本研修で身につけた知識や技能を生かし、「楽しく学びながらも、気づいたら力がしっかりついていた」と生徒が感じられるような授業ができるよう努力を続けたい。

### **授業改善にあたって参考にした資料等**

静 哲人. (2002). 『英語テスト作成の達人マニュアル』 英語教育 21 世紀叢書. 大修館書店  
安河内哲也. (2010). 『人を「その気」にさせる技術』 角川 one テーマ 21. 角川書店  
クリス・アンダーソン. (2016). 『TED TALKS スーパープレゼンを学ぶ公式ガイド』 日経 BP 社  
根岸雅史. (2017). 『テストが導く英語教育改革』 三省堂

## 入門期のスピーキング指導と練習

科目名	英語 A	学年	中 1	形態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	------	----	-----	----	----------------

### クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は3クラス 95名（男子 47名，女子 48名）の生徒である。学習意欲は旺盛で，積極的な姿勢で授業に望み，多くの生徒が活発に発言する。ほぼ全員が4年制難関大学への進学を希望している。小学校での外国語活動を経験してきたはいるが，本格的な英語学習に取り組むのは初めてという生徒がほとんどである。

### 解決すべき課題

将来生徒たちが必要とする英語力の育成，また4技能試験への対応に向け，特にスピーキング指導を計画的に行うことが重要だと感じている。これまで学校として，レシテーション（暗唱）活動を重視した取組を継続してきたが，相手にわかりやすく伝えようとする姿勢を十分に養うことができていなかったことが課題であった。そこで，聞き手を意識した発話の指導と，英語学習の初期段階として不可欠の要素である音声指導に力を入れたいと考えた。

### 事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第1回 スピーキングにかかわる学習に関するアンケート（6月実施：回答者数 95）

1. レシテーション活動にやりがいを感じますか。

感じる	どちらかといえば 感じる	どちらかといえば 感じない	感じない
43人(45.3%)	39人(41.1%)	11人(11.6%)	2人(2.1%)

2. 授業中の音読練習では抑揚を意識していますか。

している	どちらかといえば している	どちらかといえば していない	していない
32人(33.7%)	52人(54.7%)	11人(11.6%)	0人(0.0%)

3. 家での音読練習では何に気をつけて練習していますか（複数回答可）。

英文を覚えること	発音	抑揚	話すスピード
86人(40.6%)	63人(29.7%)	42人(20.3%)	20人(9.4%)

9割近い生徒がレシテーション活動にやりがいを感じている。授業で抑揚を意識して音読していると答えた生徒9割近くいるものの，家での練習では，音声面（発音・抑揚）や話すスピードよりも，英文を覚えることに意識が向いている様子がうかがえる。



・第1回スピーキングテスト（7月実施：前期中間テスト結果に基づく抽出5名）

テスト内容：英検5級および4級の2次試験問題を使い、パッセージの音読、絵に関するQ&Aのあと、関連する自分自身のことについて話す。

評価方法：自作ルーブリックによる分析的評価

	話し方（音読）	応答力（Q&A）
A	話す速度、抑揚が適切であり、リズムや区切りが自然である。	正しい文の形で適切に応答している。自然な会話の流れになっている。
B	話す速度、抑揚が適切である。	文の形にはなっているが、質問と答えの主語が一致しない等、理解に支障のない誤りがある。
C	話す速度、抑揚が適切でなく、聞き取りにくい箇所がある。	応答が語句のみ、または、ほとんど何も応答することができない。

\*話し方（音読）についてはパッセージの音読を、応答力（Q&A）については絵に関するQ&Aおよびそれに関連する自分自身のことについての質問への応答を評価対象とした。

結果

	話し方（音読）	応答力（Q&A）
生徒1	A	A
生徒2	B	B
生徒3	A	A
生徒4	C	C
生徒5	C	B

C評価の理由として、音読については単調で区切りが不適切であったり、正しく発音できない単語があったりしたことが挙げられる。また、応答力については単語のみで返答したり、語彙力不足のために言いたいことが英語で言えず沈黙してしまったりしたことが原因となっている。

**リサーチ・クエスチョン**

発音・リズムに注意しながら話したり、基礎的な文法を使って質問に答えたりする力を身につけさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安:英語力の異なる5人の生徒に対するスピーキングテストのルーブリック評価が向上する。

**改善のための手だて**

- 英語の音声の特徴を明示的に指導すれば、より英語らしく話せるようになるだろう。
  - ・日々の授業で、発音・イントネーション・強調等に注意して音読させる。
- 家庭学習でも音読練習に継続的に取り組ませれば、より英語らしい話し方が身につくだろう。
  - ・音読シートに確認のサインをしてもらうなど、保護者の協力も得て継続的に取り組ませる。
- 基礎的文法を用いた会話練習を継続的に行えば、より正確な英語でやり取りができるようになるだろう。
  - ・身の回りのことや教科書に出てきた話題について、帯活動で会話練習を行う。

## 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回スピーキングにかかわる学習に関するアンケート（12月実施：回答者数93）

### 1. レシテーション活動にやりがいを感じますか。

	感じる	どちらかといえば 感じる	どちらかといえば 感じない	感じない
6月	43人(45.3%)	39人(41.1%)	11人(11.6%)	2人(2.1%)
12月	34人(36.6%)	44人(47.3%)	11人(11.8%)	4人(4.3%)

### 2. 授業中の音読練習では抑揚を意識していますか。

	している	どちらかといえば している	どちらかといえば していない	していない
6月	32人(33.7%)	52人(54.7%)	11人(11.6%)	0人(0.0%)
12月	24人(25.8%)	50人(53.8%)	16人(17.2%)	3人(3.2%)

### 3. 家での音読練習は何に気をつけて練習していますか。（複数回答可）

	英文を覚えること	発音	抑揚	話すスピード
6月	86人(40.6%)	63人(29.7%)	42人(20.3%)	20人(9.4%)
12月	75人(48.4%)	42人(27.1%)	27人(17.4%)	11人(7.1%)

抑揚を意識して音読練習をしている割合が減っていると同時に、家での音読練習で気をつけていることで「英文を覚えること」の割合が上がっている。英文が長く難しくなり、英文を覚えることが6月よりもプライオリティが高くなり、抑揚まで意識してられないという生徒の意見も多数あった。これは、まず英文を暗唱できないと前に出て発表すること自体できなくなってしまう、と生徒が感じているからだと推測される。

- ・第2回スピーキングテスト（12月実施：受験者数5）

テスト内容・評価方法：第1回と同様

結果

	6月		12月	
	話し方（音読）	応答力（Q&A）	話し方（音読）	応答力（Q&A）
生徒1	A	A	A	A
生徒2	B	B	A	B
生徒3	A	A	A	A
生徒4	C	C	A	C
生徒5	C	B	A	B

### \*音読

第1回テストでB,C評価であった生徒を含め、第2回では全員がA評価となった。これは、発音やイントネーション、意味を考えながら音読するよう、ふだんの授業で意識し、数多くの英文を音読してきた成果であろう。未知の単語があっても、フォニックスのルールや経験則から読めるようになったことも大きな成果といえる。

#### \*応答力（絵に関する Q&A）

質問と応答の主語が一致していない場合や、単語だけで答えてしまう場面もあったが、その頻度は6月よりも格段に減った。インプットの量が前期よりも増えたこと、授業内で教科書の内容に関する質問をし、それに S+V で答える練習をしたこと、教科書の絵を用いて“see-think-wonder”（絵を見て考えたことや疑問に思ったことを話し合う活動）をしたことが効を奏したのかもしれない。

#### \*応答力（自分自身のことについて述べる）

自分自身のことについて述べる際の正確さは向上しなかった。積極的に話させる指導をしながら、より正確に言いたいことを言えるようにする支援をどうしていくかが今後の課題であろう。

### **教師の変化**

スピーキング指導について深く考えるようになった。来るべき新テストで導入されるスピーキングテストではアカデミックなスピーキングが求められている。6年後にそのレベルに達するよう生徒を指導するには、何をすべきなのかを考えて授業を設計するようになった。英語の初心者であった生徒が日々努力を重ねることによって、こんなにも上達するというのは新たな発見だった。文法的に完璧でなくとも多くのことを英語で表現できることを、生徒自身は楽しんでいるようだ。そして、楽しんでいる生徒を見るのが私自身の喜びともなった。

### **今後の課題（次の改善点など）**

ふだんレシテーション前に練習している抑揚等を、初見の英文の音読や即興のスピーキングで応用できるようにするにはどう指導すべきか、また、自由に話させる指導と正確さを高める指導のバランスをどうとるのが今後の課題である。

### **まとめ・感想**

この研修のなかで、高度な知識をもった先生方から知識を授けてもらえ、現場での悩みを相談できるというのは非常にありがたかった。あらためてお礼を申し上げたい。また、マイクロティーチングで仲間が日々どのように頑張っているのかを知ることができたのは刺激となった。私は今まで目の前の日々の授業をこなすのが精一杯で、恥ずかしながら長期的な視野でどう指導したらよいか、ということを考えてこなかったように思う。しかし、約1年に渡るこのアクション・リサーチを通し、生徒の音読が上手になったことを発見できたように、短期間で効果が表れなくとも1年を通じてできるようになればよく、その1年1年の積み重ねが6年後につながるのではないかとということが、遅ればせながら実感としてわかった。自己研さんを積み、High challenge, high support. をモットーに、アカデミアの先生方から学んだことをそのままにせず実行に移し、生徒たちの英語力を上げたいと思う。

### **授業改善にあたって参考にした資料等**

鈴木寿一・門田修平(編著). (2012). 『英語音読指導ハンドブック』大修館書店

富田かおる他(編). (2011). 『リスニングとスピーキングの理論と実践』大修館書店

Celce-Murcia, M., Brinton, D. M., Goodwin, J. M., and Griner, B. (2010). *Teaching pronunciation*. Cambridge: Cambridge University Press.

## より英語らしい話し方を身につけさせるスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス118名（男子59名、女子59名）の生徒である。英語が得意といえる生徒は少ないが、授業中の態度はまじめで、コミュニケーション活動などにはよく取り組む。学年全体の概ね9割の生徒が大学・短大・専門学校に進学するが、AO入試や指定校・推薦入試によるものがほとんどである。

### 解決すべき課題

- ・英語の発声に慣れておらず、いわゆるカタカナ英語で抑揚がない。
- ・英語に限らず、間違えることを嫌い、発話に抵抗がある生徒が多い。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回英語学習に関するアンケート（5月実施：回答数114）

生徒のスピーキングに対する興味および自信を含め、英語学習全般に関する意識についてアンケートで調べた。\*人数（%）

Q1 あなたは英語の学習が好きですか、嫌いですか？

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
18 (15.8)	41 (36.0)	35 (30.7)	20 (17.5)

Q2 将来、英語を話せることが必要だと思いますか？

必要	どちらかといえば必要	どちらかといえば不要	不要
65 (57.0)	39 (34.2)	5 (4.4)	5 (4.4)

Q3 あなたはこの授業でスピーキング力を伸ばしたいですか？

伸ばしたい	どちらかといえば伸ばしたい	どちらかといえば伸ばしたくない	伸ばしたくない
47 (41.2)	63 (55.3)	3 (2.6)	1 (0.9)

Q4 あなたは英語を話すことに抵抗がありますか？

ない	あまりない	少しある	ある
24 (21.1)	33 (28.9)	28 (33.3)	19 (16.7)

Q5 あなたは自分の英語を話す力に自信がありますか？

ある	すこしある	あまりない	ない
0 (0.0)	5 (4.4)	31 (27.2)	78 (68.4)

英語を好きな生徒と嫌いな生徒がほぼ同数であるが、91.2%の生徒が英語を話せることが必要だと認識している。また96.5%もの生徒がスピーキング力を伸ばしたいと答えた。一方で半数の生徒が英

語を話すことに抵抗を感じており、英語を話す力に「自信がある」と答えた生徒はわずか 4.4%であった。

・第1回スピーキングテスト（6月実施：受験者数 111）

テスト内容：世界遺産を紹介するスピーチ

評価方法：自作ループリックによる分析的評価

	声の大きさ	言語表現	非言語表現
◎	教室中に聞こえる大きさと話している。	英語らしいリズムとイントネーションで話している。	原稿を見ずにアイコンタクトをしながら話している。
○	注意して聞けば聞き取ることができる。	ときどきカタカナ英語が混ざりますが、概ね英語らしいリズムとイントネーションで話している。	ところどころ原稿に目を落として話している。（3回まで）
△	ほとんど聞き取れない。	終始カタカナ英語で話し、英語らしいリズムとイントネーションが見られない。	原稿を見て話している。

結果：人数（%）

	声の大きさ	言語表現	非言語表現
◎	106 (95.5)	1 (0.9)	44 (39.6)
○	5 (4.5)	13 (11.7)	30 (27.0)
△	0 (0.0)	97 (87.4)	37 (33.3)

「声の大きさ」の項目では 95%以上の生徒が◎評価であった一方で、「言語表現」については 87%以上の生徒がいわゆるカタカナ英語で、指導の必要性を感じる結果となった。「非言語表現」に関しては、約 40%の生徒が原稿を見ずに話していたものの、3分の1の生徒が原稿を見て話しており、自信を高めるために練習を工夫する必要があると感じた。

リサーチ・クエスチョン

自信を持って英語らしい話し方でスピーチできるようにするには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・評価ループリックのすべての項目で○以上となる生徒が全体の 8 割を超える。

・アンケートで「英語を話す力を伸ばせた」と感じる生徒が全体の 7 割以上になる。

改善のための手だて

- 段階的に活動の負荷を上げてスピーチ練習をさせれば、自信を持って話せるようになるだろう。
  - ・ペアやグループでの練習時間を設けることでスピーキングに対する自信の向上を図る。
  - ・スピーチのフレームを与え、発話への抵抗感を小さくする。
- 適切なリズムや発話の区切りを明示的に指導すれば、より英語らしいリズムやイントネーションで話せるようになるだろう。
  - ・教科書の音読を含め、英語を発話する際に文強勢や間の取り方についての指導を継続して行う。
- 実生活と関連づけたスピーキング活動をくり返し行えば、話すことへの関心がより高まるだろう。
  - ・帯活動として 1 分間の英会話を毎時間行い、英語を話すことへの抵抗感をなくす。

・平易な表現を使うことで英語を身近なものに感じさせる。

○ 聞き手の受容的な態度を育てれば、話し手のより活発な発話を促すことに役立つだろう。

・うなずき、あいづち、アイコンタクトなど、相手の発話に対する反応のしかたを継続して指導する。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

第2回英語学習に関するアンケート（12月実施：回答数107）

同様の質問項目でアンケートを行い、5月の調査結果と比較した。

\*人数(%), それぞれ[ ]内の数字は前回調査における割合

Q1 あなたは英語の学習が好きですか、嫌いですか？

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
25 (22.3)[15.8]	46 (41.1)[36.0]	29 (25.9)[30.7]	12 (10.7)[17.5]

Q2 将来、英語を話せることが必要だと思いますか？

必要	どちらかといえば必要	どちらかといえば不要	不要
78 (69.6)[57.0]	30 (26.8)[34.2]	3 (2.7)[4.4]	1 (0.9)[4.4]

Q3 あなたはこの授業でスピーキング力を伸ばしたいですか？

伸ばしたい	どちらかといえば伸ばしたい	どちらかといえば伸ばしたくない	伸ばしたくない
46 (41.1)[41.2]	62 (55.4)[55.3]	4 (3.6)[2.6]	0 (0.0)[0.9]

Q4 あなたは英語を話すことに抵抗がありますか？

ない	あまりない	少しある	ある
15 (13.4)[21.1]	50 (44.6)[28.9]	29 (25.9)[33.3]	18 (16.1)[16.7]

Q5 あなたは自分の英語を話す力に自信がありますか？

ある	少しある	あまりない	ない
4 (3.6)[0.0]	4 (3.6)[4.4]	34 (30.4)[27.2]	68 (60.7)[68.4]

\*Q6と7は第2回のみ実施

Q6 半年前と比べてスピーキング力を伸ばせたと思いますか？

思う	少し思う	あまり思わない	思わない
11 (9.8)	64 (57.1%)	25 (22.3)	12 (10.7)

Q7 半年前と比べて英語が好きになりましたか？

好きになった	少し好きになった	あまり変わらない	変わらない
21 (18.8)	33 (29.5%)	32 (28.6)	26 (23.2)

事後のアンケートではすべての項目で改善が見られた。また、「半年前と比べてスピーキング力を伸ばせた」という生徒は66.9%であった。改善の目安の7割にはわずかに届かなかったが、英語を話す機会を多く設けることで生徒の達成感をある程度高めることができたといえるだろう。

・第2回スピーキングテスト（12月実施：受験者数107）

テスト内容：身近な事物（自分の好きなものなど）に関するスピーチ

評価方法：自作ループリックによる分析的評価

## 結果の比較：人数(%)

	声の大きさ		言語表現		非言語表現	
	5月	12月	5月	12月	5月	12月
◎	106(95.5)	103(96.2)	1(0.9)	18(16.8)	44(39.6)	27(25.2)
○	5(4.5)	4(3.7)	13(11.7)	68(63.6)	30(27.0)	23(21.5)
△	0(0.0)	0(0.0)	97(87.4)	21(19.6)	37(33.3)	57(53.3)
◎+○	111(100)	107(100)	14(12.8)	86(80.4)	74(66.6)	50(46.7)

「声の大きさ」は変わらず良好で、「言語表現」については、◎と○を合わせた生徒の割合が 80.4% になり目標に達した (Wilcoxon の符号付順位検定で有意差あり:  $p = 0.00 < 0.05$ )。一方で「非言語表現」では△評価の割合が増えてしまった。これは発音の正確さを意識するあまり、原稿を頻繁に見てしまったことが原因であると推察される。

## 教師の変化

- ・明示的な音声指導や会話活動を取り入れたことで、今までなんとなく行ってきた音読練習やペアワークに具体的な目標を持たせて指導することができるようになった。
- ・目標を明確に設定することで、目標達成のためにどのように授業を展開し、生徒にとってどのような活動がより効果的かを考えて授業を設計するようになった。
- ・研修で得た教授法や活動を積極的に授業に取り入れ、そのことを通して各授業や單元ごとに自分の授業を振り返ることが多くなった。

## 今後の課題 (次の改善点など)

- ・ただ読むだけでなく、英語らしい発音や抑揚で発話をすることに意識が向いてきたが、英文から目を離すとたどたどしい発話になってしまう生徒が多い。より英語らしく自発的な発話ができるようになるためには、会話活動のなかでも音声面に注意を向ける指導が必要である。
- ・指導していくなかで指導計画の重要性をあらためて感じた。指導の狙いを明確にするためにも「CAN-DO リスト」にもとづいた年間指導計画の立案と指導方法の計画をしていきたい。

## まとめ・感想

今回この研修の機会をいただき、これまでの自分の授業を根本から見直すことができた。授業方法の変化があるなかでも生徒はこちらの指導についてきてくれることを知り、授業力をさらに高める必要があると感じた。また、国際言語アカデミアの先生方、ともに研修を受講した先生方の教育に対する熱意と信念に大きな感銘を受けたのと同時に、自分の指導力・英語力の未熟さをあらためて感じた。今後も自己研さんを怠らず、生徒や同僚により影響を与えられる教師を志したい。

## 授業改善にあたって参考にした資料等

- 静 哲人. (2009). 『英語授業の心・技・体』 研究社  
正頭正和. (2015). 『音声指導アイデア BOOK』 明治図書

## 会話を継続させる力と自信を高めるスピーキング指導

科目名	英語理解	学年	3	形態	HR・習熟度・ <b>小集団</b>
-----	------	----	---	----	--------------------

### クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は3年生1クラス，計19名（男子5：女子14）の生徒である。生徒により学習意欲にばらつきが多いクラスであり，英語が非常に好きな生徒もいれば，強い苦手意識を持った生徒もいる。英語での会話を慣れた生徒が数名いる一方で，基礎的文法知識が定着しておらず単語レベルでの応答にとどまる生徒も少なくない。10月頃には専門学校や大学へ進学が決まる生徒がほとんどであるため，この時期以降に学習意欲が低下する傾向がある。

### 解決すべき課題

- ・単語レベルでの応答はできるが，適切な文での応答や，会話のやり取りができない生徒が多い。
- ・頭の中で文を組み立てるのに時間がかかり，会話中に沈黙が続いてしまう生徒が多い。

### 事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第1回 英語学習に関するアンケート（6月実施：回答者数19）

生徒のスピーキングに対する興味および自信を含め，英語学習全般に関する意識についてアンケートで調べた（スピーキングに関する項目のみ抜粋）。

1. この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか？3つ選びなさい。

話す力	書く力	読む力	聞く力	発音	語彙知識	文法知識
11人(57.9%)	8人(42.1%)	5人(26.3%)	6人(31.6%)	9人(47.4%)	9人(47.4%)	7人(36.8%)

2. 日常の場面で英語を使って会話することに自信がありますか？

ある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	ない
0人(0%)	5人(26.3%)	5人(26.3%)	9人(47.4%)

57.9%の生徒が伸ばしたい力としてスピーキング力を選んでいるが，英語を話すことに自信がある，またはどちらかといえばあると回答した生徒は26.3%しかおらず，多くの生徒が話すことに対し苦手意識を持っていることが確認できた。

- ・前期スピーキングテスト（6月実施：受験者数19）

テスト内容：事前に与えたテーマについて話す **Speech** と，事前準備を行わず即興で会話をする **Conversation** の二つを行う。

評価方法：自作ルーブリックによる分析的評価（**Conversation**）



Assessment Rubric for Conversation (16点満点)				
会話を継続するためのストラテジー ・ Reactions ・ Fillers	1点	2点	3点	4点
	不自然な間や沈黙がかなり多い。	不自然な間や沈黙が多い。	不自然な間や沈黙があるが、概ね流暢に話せている。	Reactions, Fillers をうまく活用し、自然に話せている。または Fillers を必要としないくらい自然なスピードで話している。
質問や応答の質 ・ Words ・ Sentences ・ Extra information ・ Follow-up questions	1点	2点	3点	4点
	応答がほとんどできない。	単語レベルで応答ができる。	センテンスで話すことができている(時制や語順のミスなど、伝達に支障のあるミスがあまりない)。	Support sentences (extra sentences), Follow-up questions 等を加え、長い会話ができている。
発音 ・ Pronunciation ・ 音声学的現象	2点	4点		
	カタカナ発音になっている。	カタカナ発音ではない。		
積極性	2点	4点		
	あまり積極的に会話をしようとしていない。	積極的に会話をしようとしている。		
不自然な沈黙が2秒以上ある	-2点			

結果：

	人数	平均	標準偏差	最大値	最小値
スピーキングテスト(Conversation)	19	13.4	1.63	16	10

事前に準備が可能な Speech に比べ Conversation では沈黙が続く生徒が多かった。事前準備なしで話すのは難しいという生徒からの声も多くあり、即興で行う会話への習熟を図る指導の必要性を感じる結果となった。ルーブリック評価における合計点が、4 観点それぞれで合格点に達した場合（ストラテジー3点、質問・応答3点、発音4点、積極性4点）に得られる14点に達した生徒は19人中11人（57.9%）であった。

## リサーチ・クエスチョン

身近な話題について自信をもって継続的な会話ができるようになるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・会話に対する自信がついたと答える生徒が80%を超える。

・スピーキングテスト(Conversation)で14点以上を取る生徒が80%を超える。

## 改善のための手だて

- 会話を継続するためのストラテジーや、質問や応答の質を高めるためのストラテジーを明示的に指導すれば、より正確な発話で会話を続けることができるようになるだろう。
  - ・会話を継続するためのストラテジー (Reactions, Fillers) を段階的に導入する。
  - ・質問や応答の質を高めるためのストラテジー (単語レベルでの応答, 1文での応答, 複数文での応答, Follow-up questions) を段階的に導入する。
  - ・学習したストラテジーをスピーキングテストの評価規準に含め、会話力の向上を可視化する。
- 毎回の授業でスピーキング活動を行えば、英語を話すことに慣れ、自信が高まるだろう。
  - ・ストラテジーの活用を意識させながら、毎回の授業でスピーキング活動を行う。

## 生徒の変化 (途中経過, 事後の検証結果など)

- ・第2回 英語学習に関するアンケート (12月実施: 回答者数 18, 欠席による未回答 1)

1. 4月に比べ、会話をすることに自信がついてきましたか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
6人 (33.3%)	7人 (38.9%)	5人 (27.8%)	0人 (0%)

「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」と答えた生徒の割合が 72.2%であった。改善の目安としていた 80%には届かなかったが、授業改善に一定の効果があったといえるだろう。鍛えるべきポイントを明確にし、毎回のスピーキング活動でくり返し明示的な指導をしたことがこの結果につながったと考えられる。また、失敗をしてもよい、楽しく安心できる雰囲気作りを心掛けたことが、話すことへの抵抗をいくらか下げることに寄与したように感じる。

- ・後期スピーキングテスト (12月実施: 受験者数 18, 欠席 1) \*[]内は第1回テストにおける数値

	人数	平均	標準偏差	最大値	最小値
スピーキングテスト(Conversation)	18 [19]	14.2 [13.4]	2.01 [1.63]	16 [16]	9 [10]

14点以上を取った生徒は第1回の 11人 (57.9%) から 13人 (72.2%) となり約 14%伸びた。改善の目安としていた 80%には届かなかったが、事前・事後のデータがそろっている 18人について検定にかけたところ、有意な向上が認められた (Wilcoxon の符号付き順位検定:  $p = 0.046 < 0.05$ )。授業で教える内容とスピーキングテストの評価規準が明確につながっていたことで、「何を頑張ればいいのか」が生徒にとってわかりやすくなっていったように思う。点数には大きく表れなかったが、授業中の観察評価では、生徒の発言数や、長く話せる生徒の数が大きく増加している傾向が見られた。

## 教師の変化

- ・どのような力を伸ばすかを明確にすることにより、授業作りが非常にしやすくなった。
- ・独自の振り返りシートを作成し、授業後の時間を有効に使って自らの授業を振り返り分析する習慣がついた。
- ・英語学習について積極的に参考文献を読むなど、学ぶ時間が増えた。
- ・生徒の英語力の伸びを感じることで、授業を行うことがこれまで以上に楽しくなった。

## 今後の課題（次の改善点など）

- ・より細かな分析をすることで、スピーキング力を向上させる要因、向上を妨げる要因をより一層明確にしていきたい。
- ・スピーキングテストの妥当性を高めるために、外部試験のスピーキングテストを参考にし、測るべき能力を適切に測れるテストとなるよう研究したい。また、指導の結果による生徒の伸びを適切に弁別できる評価ルーブリックの作成も今後の課題である。
- ・3年生は秋ごろから学習意欲が低下する傾向にあるので、「楽しい」「もっと学びたい」と感じさせ、人生の役に立ちそうだと思うような授業内容にできるよう、工夫を重ねる必要がある。
- ・アクション・リサーチを一人で行うのではなく、少しずつ仲間を増やし、最終的には英語科全体で同じ目標に向かえるように工夫したい。

## まとめ・感想

「授業は楽しい」ということをあらためて実感することができた1年間であった。これまでは、日々の授業をなんとか必死にこなし、試験前になると教える内容を調整し帳尻を合わせるというような、「その日暮らし」ともいえる教え方をついしてしまっていたように思う。アクション・リサーチに取り組んだ今年度は、「生徒をどのように、どこまで伸ばすか」が明確であったため、つねにその目標を意識し授業計画を立てることができた。授業のどの部分を振り返るのかも明確になり、自己研さんのために何を勉強すべきなのかも明確になった。また、国際言語文化アカデミアでの研修はつねに刺激的で、英語を教えることの奥深さとおもしろさを強く実感することができた。なんとなく英語の勉強をし、ただただ闇雲に日々の授業をこなしていたこれまでは、思うような結果が出せず悩むことも多々あったが、明確な目標に向かい計画を立てたり勉強に励んだりすることができた今年度は、英語教師として非常に充実したものであった。何より、頭を悩ませて考えた授業を通し、生徒が変化していく様子を見ることができたのは、英語教師としてこの上ない喜びであった。必死に作りこんだ毎日の授業を通して、生徒の英語力が高まったと実感できたことは、自分にとって大きな励みとなり、英語教師としてのミッションをあらためて再確認させてくれた。教師は教え浸り、生徒は学び浸る、そしてともに成長を実感する。そんな当たり前の瞬間をたくさん作れる英語教師を目指して、さらなる授業改善に取り組んでいきたい。研修はこれで終わりだが、ここを新たなスタートとし、来年度もアクション・リサーチに取り組みたいと思う。語学はきっと、もっと楽しくなると信じて。

## 授業改善にあたって参考にした資料等

- 神奈川県立国際言語文化アカデミア(編著). (2012).『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要(創刊号)』  
神奈川県立国際言語文化アカデミア
- Dörnyei, Z., & Kubanyiova, M. (2014). *Motivating students, motivating teachers: Building vision in the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Teach English Now! Foundational Principles (Created by Arizona State University)  
<https://www.coursera.org/learn/english-principles>

## 基礎的な応答力を育てるスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・ <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">小集団</span>
-----	---------------	----	---	----	---

### クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は1学年6クラス，計78人（男子50人，女子28人）の生徒である。授業以外で自ら積極的に学習を行う習慣が身についておらず，英語に対しても苦手意識が強い生徒が多い。物事に集中して取り組むことも得意ではないが，多くの生徒は明るく素直で，ペアワークやグループワークでは協力し合って学習することができる。進路に関しては，各種上級学校へ進学する生徒が8割を超えるが，ほぼ全員が推薦もしくはAO入試を選択する。

### 解決すべき課題

基礎的文法知識が十分ではなく，口頭による英語の問いを正確に理解できなかつたり，単語やフレーズで答えたりする生徒が大半を占めている。また，自信のなさからか，発話までに時間がかかり，声も小さく，英語らしい発音もできていない。誤りをくり返し指摘しても，なかなか改善が見られない。

### 事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第1回「英語を話す力」についての意識調査（8月実施：回答者数78）＊％(人数)

1. 「英語を話す力」について自信がありますか。

自信がある	どちらかといえば 自信がある	どちらかといえば 自信がない	自信がない
1.3 (1)	16.7 (13)	35.9 (28)	46.2 (36)

2. 今後，「英語を話す力」を伸ばしたいと思いますか。

伸ばしたい	どちらかといえば 伸ばしたい	どちらかといえば 伸ばしたくない	伸ばしたくない
48.7 (38)	43.6 (34)	7.7 (6)	0.0 (0)

#### <分析と考察>

82.1%(64人)の生徒が，話す力について「(どちらかと言えば) 自信がない」と回答したが，同時に92.3%(72人)がスピーキングの力を「(どちらかと言えば) 伸ばしたい」と考えており，生徒のスピーキングへの関心の高さが明らかになった。また日頃の取組状況などから，興味はあるが自分自身では勉強方法がわからない生徒が多いことが推測できた。生徒の不安を取り除き，成功体験を与えられるような言語活動を授業のなかで継続的に行うことが必要だと考えた。

- ・第1回 スピーキングテスト（8月実施：受験者数78）

テスト内容・形式：中学校の既習文法を使ったQ&A（7問）

質問・解答例：Q: What language is spoken in Australia?

A: English is spoken in Australia.

評価方法：自作ルーブリックによる評価

A (4点)	B (3点)	C (2点)	D (1点)
質問を理解し、S+Vの形で(概ね)正確に答えることができる。	質問を理解し、S+Vの形で答えることができるが、誤りがみられる。	質問を理解し、単語や語句でなら答えることができる。	質問を理解していない、または答えられない、見当違いの回答をする。

結果：点数化したときの7問の得点合計(4点×7問=28点満点)の分析

平均点	標準偏差	最高点	最低点	21点(平均B評価)以上
7.9点	3.27	17点	0点	2人(2.6%)

評価の分布状況

全生徒の全回答(7問×78人=546)に占めるA評価の回答の割合	12.6%
全生徒の全回答(7問×78人=546)に占めるB評価の回答の割合	18.3%
全生徒の全回答(7問×78人=546)に占めるC評価の回答の割合	37.9%
全生徒の全回答(7問×78人=546)に占めるD評価の回答の割合	31.1%

<分析と考察>

「質問にS+Vの形で答えられる」ことを目標にして、平均してB評価以上(21点以上)の生徒の割合を算出したところ、わずかに2.6%(2人)しかいなかった。合計の平均値も28点満点中の7.9点にとどまった。また、全生徒の全回答のうちの3割以上がD評価であった。しかし、テスト中には、頑張っただけで答えようとする生徒の意欲が感じられた。S+Vの正しい文構造を身につけるための指導をしながら、質問理解と発話の練習機会をできるだけ多く与えることが解決方法になるだろうと考えた。

## リサーチ・クエスチョン

簡単な質問を即座に理解し、文の形で応答できる力を身につけさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：ルーブリック評価に基づくスピーキングテストの合計得点が21点以上(平均B評価以上)の生徒の割合が7割以上になる。

## 改善のための手だて

- 授業中に会話練習をくり返し行えば、文での形でのやりとりに慣れ、話すことへの不安感や抵抗感が軽減するだろう。
  - ・ 毎回、授業冒頭で簡単なQ&A活動(ペア・全体)を行い、自信や達成感を味わえるようにする。
  - ・ 複数のALTとのインタラクションを通して、さまざまな英語に触れさせる。
- 会話練習で扱った文法を使わせるライティングタスクを与えれば、話すための知識として文構造が定着するだろう。
  - ・ 小テストや定期試験で文法項目を指定したライティング問題を出題する。
- 基本的な発音指導を明示的に行えば、より英語らしく話せることで自信が高まるだろう。
  - ・ 教師、ALTによるモデル発音を反復復習させる。
  - ・ 教科書英文の音読練習(オーバーラッピング)をする。

## 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

### ・授業内での生徒の取組状況

毎回授業の冒頭 10 分間で、ペアとクラス全体で Q&A 活動を行ったことによって、生徒の集中力を培うことができた。また、全体での活動では、教師の質問に正しく答えられるまで何度もたずねられるので、恥ずかしさや悔しさからか、生徒は全員真剣に取り組んでいた。さらに、その全体活動では、教師や ALT からの質問内容がペア練習でのものと異なるので、スピーキングのみならず、リスニングに対しても意識が高まっていることがうかがえた。後述する 12 月のアンケートの自由記述でも「聞く力も高まった」と答えた生徒が 5 人いた。

### ・第 2 回 スピーキングテスト（12 月実施：受験者数 78）

7 月と同様の形式で、類似した 7 つの質問によるテストを実施し、ループリックで評価した。

結果：点数化したときの 7 問の得点合計（4 点×7 問=28 点満点）の分析（下段は第 1 回のデータ）

平均点	標準偏差	最高点	最低点	21 点（平均 B 評価）以上
16.7 点 (7.9 点)	3.50 (3.27)	21 点 (17 点)	5 点 (0 点)	66 人 (84.6%) (2 人：2.6%)

評価の分布状況（下段は第 1 回のデータ）

全生徒の全回答（7 問×78 人=546）に占める A 評価の回答の割合	63.9% (12.6%)
全生徒の全回答（7 問×78 人=546）に占める B 評価の回答の割合	19.6% (18.3%)
全生徒の全回答（7 問×78 人=546）に占める C 評価の回答の割合	7.0% (37.9%)
全生徒の全回答（7 問×78 人=546）に占める D 評価の回答の割合	9.5% (31.1%)

### <分析と考察>

合計得点が 21 点以上（平均 B 評価以上）の生徒の割合は 84.6%になり、改善の目標を大きく上回ることができた。A 評価の割合も大幅に増え、7 つの質問すべてに正確に答える生徒が 5 人もでた。生徒に心理的負担をかけないようにやさしい質問をくり返した点を考慮しても、スピーキング力は全体的に向上したといえるだろう。また、2 回のテストの評価を検定（Wilcoxon の符号付順位検定）にかけたところ、7 問すべての評価で統計学的に有意な向上が認められた（すべて  $p=0.00 < 0.05$ ）。このテスト結果から、外国語の習得における反復練習の重要性をあらためて認識した。今後も同様のスピーキング活動を授業内で継続的に行うことで、生徒が無理なく楽しみながら能力を向上させることができると確信するに至った。

### ・第 2 回「英語を話す力」についての意識調査（12 月実施：回答者数 78） \* %(人数)

#### 1.（8 月と比較して）「英語を話す力」について自信がありますか。

自信がある	どちらかといえば 自信がある	どちらかといえば 自信がない	自信がない
21.8(17)	39.7(31)	29.5(23)	9.0(7)

#### 2. 今後、「英語を話す力」を伸ばしたいと思いますか。

伸ばしたい	どちらかといえば 伸ばしたい	どちらかといえば 伸ばしたくない	伸ばしたくない
71.8(56)	26.9(21)	1.3(1)	0.0(0)

## <分析と考察>

3か月前と比較して、61.5%(48人)の生徒がスピーキングに対し「(どちらかといえば)自信がある」と答えた。平易なQ&A活動をくり返し行うことで、成功体験が積み重なって自信につながったと考えられる。また、今後も積極的にスピーキング力を伸ばしたいという生徒が48.7%(38人)から71.8%(56人)にまで増加したことから、その成功体験がその後の学習意欲にもつながったことがうかがえる。自由記述でも「もっと頑張りたいと思えるようになった」という意見が多くあり、この一連の取組によって、生徒の学習意欲を引き出すことができたといえるだろう。

## **教師の変化**

第1回の意識調査で92%の生徒が「(どちらかと言えば)スピーキングの力を伸ばしたい」と回答したことには、少なからず驚いた。調査を行うことによって、ふだんはわかりづらい生徒の内なる気持ちを知ることができ、当初は不安だったアクション・リサーチの実践に勇気と自信が芽生えた。

これまでは、ひたすら「全員が積極的に参加する楽しい授業」を目標に授業を展開していたが、アクション・リサーチを通じて、つねに「生徒の英語力を向上させる授業」を実践しなければいけないと気づくことができた。そしてそのためには、問題発見・意識調査・戦略・分析・検証が必要であることも実感した。

## **今後の課題(次の改善点など)**

第1回のスピーキングテストに際して、4段階のルーブリックを用意したが、その場で瞬時に評価することの難しさを実感した。今回の生徒の解答パターンを分類し、評価のベンチマークにしたいと考えている。発音については、12月の意識調査では8割以上の生徒が「発音が改善したと思う」と答えているが、自分としては指導不足を感じている。より効果的な指導のために、音声学についてもあらためて見識を深める必要があると感じた。今回の授業改善にあたり、スピーキングの力を伸ばす活動を学年共通で実践したかったが、実現にいたらなかった。学年・学校全体で共通の指導目標を設定することの重要性を再確認した。

## **まとめ・感想**

勤務校で日常の業務を行いながら、研修を受講し、問題点を確認し、そこからアクション・リサーチを実施することは、当初精神的にも肉体的にも負担だったと言わざるを得ない。研修で学んだ最新の教授法の多くも、自身の生徒たちに適用するのは至難であるように思われた。しかし、この研修に参加しなければ、生徒たちが一生懸命取り組んでいる様子や、結果に対して素直に一喜一憂している瞬間を共有することはなかったのだと振り返ると、この機会を与えられたことに心から感謝したい。生徒たちとの関係も、より密なものになったと信じている。生徒の成長を実感できることは、教師の醍醐味の一つであり、生徒たちの未知の可能性を信じる姿勢が大切であるということも再認識できた。

講師のみなさんや若い受講者の方々からは、英語教育へのさらなる情熱を喚起していただいた。語学教育のプロとしての責任の重さを忘れずに、何よりも自身が成長を続けることを怠ってはいけないと痛感した。

## やり取りする力を伸ばすスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2クラス，合計76名（男子37名，女子39名）の生徒である。全体的にペアワークやグループワークなどの活動は積極的に行うが，英語に苦手意識を持つ生徒が多い。多くの生徒が大学進学を希望している。すでに全体の8割が，AO入試や指定校推薦によって，大学か専門学校に進路が決まっている。

### 解決すべき課題

- ・基礎的な文法を使って会話を続けることができないため，英語を話すことに抵抗感を持っている。
- ・人前で英語を話す際，誤りを恐れているためか，黙ってしまったり，日本語を使ってしまったりする生徒が多い。

### 事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第1回 英語学習に関するアンケート（6月：回答者数76）

#### 1. 英語のどのような力を一番伸ばしたいと思いますか？

英語を話す力	英語を読む力	英語を書く力	英語を聞く力
50人(65.8%)	11人(14.5%)	11人(14.5%)	4人(5.3%)

#### 2. 将来英語を話す力が必要になると思いますか？

必要	どちらかといえば必要	どちらかといえば不要	不要
34人(44.7%)	31人(40.8%)	11人(14.5%)	0人(0.0%)

#### 3. 英語で質問をすることに自信がありますか？

まあまあある	少しある	あまりない	まったくない
1人(1.3%)	3人(4.0%)	45人(59.2%)	27人(35.5%)

#### 4. 英語の質問に答えることに自信がありますか？

まあまあある	少しある	あまりない	まったくない
0人(0.0%)	6人(7.9%)	45人(59.2%)	25人(32.9%)

将来英語を必要であると考え，話す力を伸ばしたいと考える生徒が多いが，英語で質問すること・答えることに「自信がない」という生徒が9割以上であることがわかった。あらためて，英語での質問のしかたや答え方の基本を指導して発話に対する自信を身につけさせる必要性を感じた。



・第1回スピーキングテスト（6月実施：受験者数 75）

テスト内容：身近な話題についての会話（生徒同士のインタラクション）

評価方法：自作ルーブリックによる分析的評価

	相手に伝える工夫	質問する力	応答する力
A	ジェスチャーなど、相手に伝える工夫をしながら、わかりやすい英語で話している。	文法的に正しい英語で質問している。	理由や補足情報をつけて相手にわかるように返答している。
B	相手にわかる英語で話している。	文法に誤りはあるが、必要な単語を用いて相手にわかるように質問している。	相手にわかるように返答している。
C	相手に伝える工夫が見られず、英語が理解しにくい。	相手にわかるように質問することができない。	相手にわかるように返答することができない。

結果：

	相手に伝える工夫	質問する力	応答する力
A	6人(8.0%)	5人(6.7%)	20人(26.7%)
B	66人(88.0%)	53人(70.7%)	46人(61.3%)
C	3人(4.0%)	17人(22.7%)	9人(12.0%)

すべての項目で、B評価以上の生徒は8割程度以上おり、全体的には相手にわかる程度の発話が概ねできていると思われた。しかし、正確な文法での質問、会話の継続に必要なより詳しい情報の伝達や話し方の工夫については、まだまだできていないため、このような課題が自信のなさや沈黙につながっていると考えた。そこで、「各項目 A 評価」を目標にして、発話に対する自信を高めるための指導のしかたを考えることにした。

## リサーチ・クエスチョン

相手に伝える工夫をしながら、基礎的な文法を使った質問や話が続くような応答で、自信を持って会話ができるようにするにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・ルーブリックの各項目の評価が A の生徒が増える。

・英語での質問／応答に「自信がある」という生徒が増える。

## 改善のための手だて

○ 会話のフレームを使った練習を継続的に行えば、会話に必要な知識や方略が身につく、自信を持って会話を続けることができるだろう。

・“One-minute Conversation”

1. その日のトピックについて、フレームを使ってペアで1分間会話をする。
2. 言いたくても出てこなかった単語や相手を使って理解できなかった単語を調べる。
3. 相手を変えて、もう一度会話をする。

- 疑問文の作り方を明示的に指導すれば、正確な英語で質問をすることで会話を続けることができるようになるだろう。
  - ・“One-minute Conversation” や Post-reading 活動の前に、黒板とスライドを用いて、会話で使う疑問文の文法指導を行う。
- Post-reading 活動として内容に関する意見交換の会話活動を行えば、自分の考えを英語で表現することに慣れ、自信が高まるだろう。
  - ・学んだフレームと疑問文の文法事項を用いて、ペアで教科書内容に関する意見交換を行う。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回 英語学習に関するアンケート（12月：回答者数 75）

※それぞれ[ ]内の数字は前回調査における割合

1. 英語の学習においてどのような力を一番伸ばしたいと思いますか？

英語を話す力	英語を読む力	英語を書く力	英語を聞く力
39人(51.3%)[65.8%]	10人(13.2%)[14.5%]	6人(7.9%)[14.5%]	20人(26.3%)[5.3%]

2. あなたは将来英語を話す力が必要になると感じますか？

必要	どちらかといえば必要	どちらかといえば不要	不要
44人(58.7%)[44.7%]	32人(30.7%)[40.8%]	7人(9.3%)[14.5%]	1人(1.3%)[0.0%]

3. あなたは英語で質問をすることに自信がありますか？

まあまあある	少しある	あまりない	まったくない
0人(0.0%)[1.3%]	7人(9.3%)[3.9%]	50人(66.7%)[59.2%]	18人(24.0%)[35.5%]

4. あなたは英語の質問に答えることに自信がありますか？

まあまあある	少しある	あまりない	まったくない
1人(1.3%)[0.0%]	7人(9.3%)[7.9%]	48人(64.0%)[59.2%]	19人(25.3%)[32.9%]

英語での質問や応答に対する自信については大きな改善が見られなかったが、質問・応答に「自信がまったくない」という生徒は少し減少した（それぞれ 35.5→24.0%、32.9→25.3%）。日常的な会話活動の成果が少し現れたのではないかとと思われる。興味深いことに、一番伸ばしたい力として「英語を聞く力」を挙げた生徒の割合が大幅に増えた（5.3→26.3%）。会話活動のなかで、英語を聞く力の大切さも実感できたのかもしれない。

第2回 スピーキングテスト（12月実施：受験者数 73）

テスト内容・評価方法：前回と同様

結果：

※それぞれ[ ]内の数字は前回調査における割合

	相手に伝える工夫	質問する力	応答する力
A	15人(20.5%)[8.0%]	24人(32.9%)[6.7%]	29人(39.7%)[26.7%]
B	55人(75.3%)[88.0%]	46人(63.0%)[70.7%]	42人(57.5%)[61.3%]
C	3人(4.1%)[4.0%]	3人(4.1%)[22.7%]	2人(2.7%)[12.0%]

評価が A の生徒が「相手に伝える工夫」では 8.0%から 20.5%, 「質問する力」では 6.7%から 32.9%, 「応答する力」では 26.7%から 39.7%と全項目で 10%以上増加していることから, 改善の手だての効果はあったと言ってよいだろう。2 回のデータがそろっている 71 人について, 検定 (Wilcoxon の符号付順位検定) を行ったところ, 「質問する力」「応答する力」で統計学的な向上が認められた (それぞれ  $p=0.00, 0.02 < 0.05$ )。もっとも向上したのは「質問する力」であるが, C 評価であった 3 人の生徒は 2 回目のテストでも疑問文を作ることができない状態であったため, その他の項目の指導とあわせて, さらなる工夫が必要であると感じた。

## **教師の変化**

生徒の現状を明確に数字で把握することで授業に対する意識が変わり, 明確に目標を設定することで, 生徒の課題解決に日々向き合うことができた。生徒が学習意欲を持って英語に取り組むことができるかどうかは, 生徒だけの責任ではなく, 教師が適切な目標設定に基づいて授業をデザインし, 生徒にその目標や活動のねらいを明確に伝えられるかどうかにかかっていると感じた。あらためて, 生徒のニーズに合わせた授業改善の必要性を感じ, 授業内や授業前後での生徒の反応をメモに取り, 次の授業に生かすようになった。

## **今後の課題 (次の改善点など)**

今回は, 文法指導による疑問文の作り方やフレームの活用による会話に必要な表現・方略を身につけるということを柱に授業を行ったが, フレームの表現・方略, 疑問文のための文法知識ともに, 全体的にはまだ定着が不十分であった。フレームを汎用的にくり返し使える授業計画と基礎的文法の指導の工夫が, 今後の課題である。また, このようなアクション・リサーチによる授業改善を組織的に行いながら, 一致した効果的指導と生徒の英語力向上に寄与する評価システムを実現することが何より必要なことである。

## **まとめ・感想**

課題とそれに対する手だてを考えて授業改善を行っていくことは, 本来教師が当たり前に行うべきことであるとあらためて感じた。今回の研修は, あらためて授業について考える大きなきっかけになり, 教師の工夫次第で生徒も変わるのだということを体感すると同時に, 自分自身の自己研さんの必要性も感じる事ができた。この経験をこれからの授業改善につなげていきたい。今回のスピーキング活動の取組で生徒がリスニングスキルの必要性を感じ始めていたことをヒントに, 今度はこの 2 技能の育成にかかわるアクション・リサーチを行ってみたいと思う。

## **授業改善にあたって参考にした資料等**

泉恵美子・門田修平(編著). (2016). 『英語スピーキング指導ハンドブック』大修館書店

## 主体的な読解を促すリーディング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は3クラス，合計119名（男子49名，女子70名）の生徒である。どのクラスも明るく活発な生徒が多い一方，授業に集中できない生徒も多々いる。また，英語学習に対する意欲が高い生徒はあまり多いとはいえない。各種上級学校への進学希望者が9割ほどいるが，推薦やAO入試で進学を考えている生徒が多い。

### 解決すべき課題

主体的に英文を読み，概要や要点を理解できるようになってほしいが，読む前から問題に取り組みうとしない生徒が多い。また，単語の意味が理解できないと文章を読み進めることができず，概要把握も困難な生徒が多くいる。教科書英文の説明に終始し，生徒が自分の力で英文を読む機会を与えてこなかったことも原因の一つであると思われる。

### 事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第1回 英語学習についてのアンケート（7月実施：回答者数 118）

生徒のスピーキングに対する興味関心および自信等について意識調査をした。

1. あなたは英語の学習が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
21人 (17.8%)	43人 (36.4%)	37人 (31.4%)	17人 (14.4%)

2. 英語をもっと勉強したいと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
34人 (28.8%)	48人 (40.7%)	25人 (21.2%)	11人 (9.3%)

3. 初めて読む英文を読んで概要・要点を理解する自信がありますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
34人 (28.8%)	48人 (40.7%)	25人 (21.2%)	11人 (9.3%)

#### <分析と考察>

\*「英語の学習が好き」と答えた生徒は54.2%おり，「英語をもっと勉強したい」と答える生徒も7割近くいた。英語に対するネガティブな感情は授業中の消極的な態度から推察されたほどには高くないことがわかった。

\* 「初見の文章を理解する自信がある」と答えた生徒は 31.3%となり、英語は嫌いではないが苦手意識を持っている生徒が多くいることがわかった。

・第1回 英検3級問題結果（7月実施）

英検3級の長文を読ませ、5問の読解問題を与えた（1問1点）。

受験者数	平均点	最高点	最低点	標準偏差	8割以上正解者
117	3.8	5	0	1.23	77人（65.8%）

<分析と考察>

\* 定期テスト直後に実施したこともあり、集中力に欠け、早い段階で読むのをあきらめてしまっている生徒も多くいた。学習への積極的な取組を促すより一層の工夫が必要であると感じた。

\* 全体の平均点は3.8点（正答率75.6%）と比較的高い結果となったが、8割以上正解できた生徒の数は65.8%にとどまった。

\* 定期試験では高得点を取れるが、初見の英文では間違ってしまうという生徒も多くいた。自分の力で英文を読むために必要な英文読解のスキルを、授業で身につけさせていないことが原因だと考えられる。

## リサーチ・クエスチョン

生徒が主体的に初見の英文を読み、概要・要点を理解する力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検3級の長文内容一致問題を5問中4問以上正解する生徒の割合が8割を超える。

## 改善のための手だて

- プレリーディング活動を充実させれば、興味を持って意欲的に英文を読むようになるだろう。
  - ・ オーラルイントロダクションで教科書英文に関する質問を簡単な英語で行う。
  - ・ 生徒が興味を持つような視覚教材を提示する。
- 英文の概要や要点をつかむタスクを与えれば、自分の力で内容を理解できるようになるだろう。
  - ・ 英文全体、および各段落の概要や要点をつかむ課題や発問に取り組ませる。
- 読解ストラテジーを指導し、練習させれば自分の力で英文を読み進める力が身につくだろう。
  - ・ ディスコースマーカー、未知語の推測等の指導をする。

## 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・オーラルイントロダクションへの生徒の反応

教科書の内容に関連する写真を示すことで生徒が授業に興味を示し、授業における教師とのやり取りもより活発になった。「次はどうなるのだろうか？」という疑問を残すことで、以前に比べて積極的に英文を読もうとする生徒の数が増えた。

・授業用ワークシートへの取組状況

以前は本文の説明を先に行っていたが、生徒自身に英文を読ませた後に問題を解かせるようにワークシートを作り変えた。最初は抵抗を示す生徒も多かったが、次第に読むことに慣れ、積極的に取り組む姿が多く見られるようになった。

・第2回 英語学習についてのアンケート（12月実施：回答者数 118）

1. あなたは英語の学習が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
23人 (19.5%)	54人 (45.8%)	32人 (27.1%)	9人 (7.6%)

2. 英語をもっと勉強したいと思いませんか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
40人 (33.9%)	50人 (42.4%)	23人 (19.5%)	5人 (4.2%)

3. 初めて読む文章を読んで概要・要点を理解する自信がありますか。

自信がある	どちらかといえば 自信がある	どちらかといえば 自信がない	自信がない
5人 (4.2%)	39人 (33.1%)	53人 (44.9%)	21人 (17.8%)

<分析と考察>

- \* 「英語が好き」「英語をもっと勉強したい」と答えた生徒はいずれも増えた。これは、定期テストの平均点がよく、また、第2回の英検3級の問題の結果が改善されたことにより、生徒に自信が芽生えたことが大きな要因だと推察される。
- \* 「初見の文章を理解する自信がある」と答えた生徒の割合も 6.0%増え、わずかながら改善が見られた。生徒たちに教科書以外の英文を読ませ、問題に答えさせることで「できる」と感じられたのではないかと考えられる。

・第2回 英検3級問題結果（12月実施）\*問題形式は第1回と同様

受験者数	平均点	最高点	最低点	標準偏差	8割以上正解者
115	4.3	5	0	0.93	97人 (83.7%)

<分析と考察>

- \* 改善の目安であった5問中4問以上正解する生徒の割合が8割を超え、大きく改善が見られた。教科書本文の説明をする前に生徒たち自身に英文を読ませる課題を多く与えたことや、読解ストラテジーの指導が今回の結果に大きく影響したと考えられる。
- \* 8割以上正解した生徒の数が増えただけでなく、正解が4割未満の生徒の数も前回20人であったのに対し、今回は5人と大幅に減らすことができた。これは、プレリーディング活動としてオーラルイントロダクションを充実させたことで主体的に英文を読む意識が高まり、読むのをあきらめてしまう生徒の数が減ったことが要因だと考えられる。

## **教師の変化**

- ・オーラルイントロダクション用のスライドやプリントの準備に時間がかかったが、教材研究をより深く行うことで背景知識などについても調べるようになり、自分自身楽しんで教材研究を進めることができた。
- ・本文の説明を減らし、生徒の活動時間を増やすことで授業に活気が生まれ、生徒の反応もよくなり、授業を楽しむことができた。

## **今後の課題（次の改善点など）**

英検3級の問題の全体の正答率は改善されたが、第5問の概要問題に関しては全体の正答率は下がってしまった。これは、授業のなかで本文全体の概要を問う課題を設定することが不十分だったためと考えられる。今回はリーディングに焦点を絞って授業改善を行ってきたが、授業を進めていくなかで生徒に話させたり書かせたりする活動がまだまだ足りないように感じた。指導方法も含め今後の課題とし、生徒に力をつけさせられるような授業を実施していきたい。

## **まとめ・感想**

今回の研修は少人数での受講ということもありはじめは不安や緊張もあったが、次第に前向きな気持ちで取り組むことができるようになった。アカデミアの研修では毎回、講師の方々からアドバイスをいただき、意識の高い仲間たちから刺激をもらうことができ、新たな発見続きの日々であった。研修が始まった当初の授業訪問では多くの指摘をいただき、いかに自分の指導力が足りないかを痛感したが、今回の研修がなければそのことにも気づくことができなかつたはずである。あらためて今回の研修の機会をいただけたことに感謝を申し上げたい。われわれ教師が強い意志を持って授業を改善しようと試みれば、生徒もそれに応じてくれるということを実感することができた。今後はリーディングも含めた4技能すべてに関して授業改善を行い、生徒の確かな英語力をつけさせることができる教師になりたい。

## 日本語訳に頼らない読解の指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2クラス76名（男子34名、女子42名）の生徒である。両クラスとも、7割以上の生徒が4年制大学への進学を希望している。全体の過半数が推薦・AO入試による進学を希望しており、全体で約2割の生徒が一般入試での進学を目指している。全体的に英語への学習意欲や興味に大きな差がある。

### 解決すべき課題

英文読解に関して、授業では語句の意味や日本語訳を安易に与え、定期テストでも既習テキストを出題してきた。そのため、単語や英文とその和訳を丸暗記するという学習を助長し、自分の力で英文の構造、文章の要点や概要をとらえるスキルを十分に育てることができていなかった。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回「英語に関する意識調査」（6月実施：回答者数75）＊人数

1. 伸ばしたい英語の力はどれですか。3つ選んで下さい。

聞く力	話す力	読む力	書く力	語彙の知識	文法の知識
31 (41.3%)	33 (44.0%)	45 (60.0%)	35 (46.7%)	35 (46.7%)	46 (61.3%)

2. 英文読解は得意ですか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
5 (6.7%)	14 (18.7%)	39 (52.0%)	17 (22.7%)

3. 教科書の英文を理解するのに日本語訳は必要ですか。

不要	どちらかといえば不要	どちらかといえば必要	必要
1 (1.3%)	7 (9.3%)	23 (30.7%)	44 (58.7%)

4. 1週間の英語の勉強時間はどのくらいですか（自宅または塾・予備校等で）。

4時間以上	2時間以上4時間未満	1時間以上2時間未満	1時間未満
20 (26.7%)	14 (18.7%)	15 (20.0%)	26 (34.7%)

#### <分析と考察>

読む力や文法の知識を伸ばしたいと考える生徒が半数以上いることが確認できた。大学受験を身近に控えて、入試問題に必要な知識・スキルへの意識が高まってきたと思われる。しかし、7割以上の生徒が英文読解に苦手意識を持っており、9割近くが日本語訳に頼った読解をしていることがわかった。伸ばしたい英語の力があるにもかかわらず、半数の生徒の自宅学習時間が1週間で2時間未満ということが判明した。家庭学習の習慣づけ、宿題の与え方などにも工夫が必要だとあらためて感じた。

- ・第1回「英検問題にチャレンジ！」（6月実施：受験者数73）

英検準2級の長文読解問題（設問5問＝要点問題4問＋自作の概要問題1問：1点×5）



平均点	標準偏差	最高点	最低点	6割以上正解
2.7点	1.49	5点	0点	39人(53.4%)

テスト直後のアンケート（回答者数 73）\*人数

「英文を読むうえで難しかったこと」を2つ選択（「特に難しさを感じない」はその1つのみ）

文法が わからなかった	単語が わからなかった	時間内に読み 切れなかった	質問が理解 できなかった	話の流れが わからなかった	特に難しさを 感じなかった
19 (26.0%)	45 (61.6%)	30 (41.0%)	21 (28.8%)	13 (17.8%)	6 (8.2%)

<分析と考察>

53.4%が6割以上正解しているが、9割以上の生徒が長文読解に何かしらの難しさを感じていた。特に、未知語や時間内の読解に苦戦した生徒が多かった。未知語があっても意味を推測しながら読み進めるスキルが十分に身につけていないことが推察された。また、授業のなかで制限時間内に読む練習の機会をあまり与えてこなかったため、逐語読みの習慣から、読み終えられなかった生徒が多かったのかもしれない。定期テストで高得点を取っている生徒でさえ、段落ごとの要点や文章全体の概要を把握できておらず、そのとらえ方も身につけていないということが再確認できた。

### リサーチ・クエスチョン

日本語に頼らずに自力で英文を読み、内容をできるだけ速く正確に理解できるようにするにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検準2級の読解問題の正答率が6割以上の生徒が全体の7割以上になる。

### 改善のための手だて

- 与える語彙や特定のフレーズ訳を厳選すれば、文脈から意味を推測する訓練につながり、自力で英文を読めるようになるだろう。
  - ・ワークシートの語彙にかかわるタスクを改善する。
  - ・ICTを有効活用し、ダイアログのなかで語彙学習に取り組ませる。
- まとまった英文の概要や要点をとらえる読解タスクを与えれば、個々の英文の日本語訳にとらわれずに内容を理解できるようになるだろう。
  - ・グラフィックオーガナイザーによる読解のタスクを与える（自分のことばで日本語を記入）。
  - ・日本語訳は単元の学習後に配布する。
  - ・ペアワークで仲間と要点や概要の理解を深められるタスクを与える。
- 読解タスクや初見の英文読解演習に時間制限を設ければ、速読即解の意識が高まるだろう。
  - ・達成感を与えるため、比較的易しめの初見英文を使用する。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・学習活動への反応（観察）

\*グラフィックオーガナイザーについて

はじめは安易に和訳して空所補充をしようとする生徒が多かったが、徐々に文章の要点や概要を自分のことばで理解しようとする意識が定着してきたように思われる。

\*会話形式の語彙タスクについて

重要語彙の意味やその語法については会話形式により文脈を持たせて演習したが、生徒は「毎回やってほしい」と、楽しそうに取り組んでいた。

＊ペアワークでの読解タスクについて

スライドを活用した、ペア活動としてのインフォメーションギャップタスク（英問英答）により、相手に伝える必要性から、より注意深く読解に取り組む様子が見られた。

＊日本語訳の「後渡し」について

当初は「日本語訳がなかったら無理」という声もあったが、自力で読むことの意義や目的を何度も説明した結果、訳なしでも積極的に読解に取り組もうとする生徒が増えたように思われる。

・第2回「英語に関する意識調査」（12月実施：回答者数 62）＊人数

1. 自分のなかで伸びたと感じられる英語の力はどれですか。3つまで選んで下さい。

聞く力	話す力	読む力	書く力	語彙の知識	文法の知識
16 (25.8%)	4 (6.4%)	44 (71.0%)	21 (33.9%)	53 (85.4%)	34 (54.0%)

2. 英語を読む力は身についたと思いますか。

身についた	どちらかといえば 身についた	どちらかといえば 身についていない	身についていない
22 (35.5%)	26 (41.9%)	11 (17.7%)	3 (4.8%)

3. 教科書の英文を理解するのに日本語訳は必要ですか。

不要	どちらかといえば不要	どちらかといえば必要	必要
5 (8.1%)	9 (14.5%)	28 (45.2%)	20 (32.3%)

4. ハンドアウトのグラフィックオーガナイザーは本文の読解に役立ちましたか。

役立った	どちらかといえば 役立った	どちらかといえば 役立たなかった	役立たなかった
30 (49.2%)	26 (42.6%)	5 (8.2%)	0 (0.0%)

5. 1週間の英語の勉強時間はどのくらいですか（自宅または塾・予備校等で）。

4時間以上	2時間以上 4時間未満	1時間以上 2時間未満	1時間未満
29 (46.8%)	2 (3.2%)	8 (12.9%)	23 (37.1%)

<分析と考察>

読む力が身についた・伸びたと感じている生徒の割合が多いが、いまだに日本語訳に頼っている生徒が多いといえる。9割以上の生徒が、グラフィックオーガナイザーが「役立った」としているのは、英文をすべて日本語に訳して理解するという意識から、要点や概要理解の確認のために日本語を使うという意識に変わってきたためかもしれない。受験を控え、自宅での英語学習時間が1週間で4時間以上という生徒が20%以上増えた一方で、相変わらず50%の生徒は2時間未満であることが確認できた。早い時期に進路が決まった生徒たちの英語離れが大きな要因であろう。

・第2回「英検問題にチャレンジ！」（12月実施：受験者数 70）

英検準2級の長文読解問題（設問5問＝要点問題4問＋自作の概要問題1問：1点×5、）

平均点	標準偏差	最高点	最低点	6割以上正解
2.4点	1.28	5点	0点	32人 (45.7%)

テスト直後のアンケート（回答者数 70）＊人数

「英文を読むうえで難しかったこと」を2つ選択（「特に難しさを感じない」はその1つのみ）

文法が わからなかった	単語が わからなかった	時間内に読み 切れなかった	質問が理解 できなかった	話の流れが わからなかった	特に難しさを 感じなかった
19 (27.1%)	35 (50.0%)	20 (28.6%)	19 (27.1%)	19 (27.1%)	11 (15.7%)

### <分析と考察>

改善の目安（6割以上正解できる生徒の割合が7割以上）には至らなかった。読解の阻害要因として語彙力不足を挙げた生徒が依然として多いが、未知語推測のストラテジーが十分身につけていないだけでなく、そもそも単語を知らなさ過ぎて推測もできないという可能性も考えられる。効果的な語彙指導を1年次から積み上げる必要があったと痛感した。話の流れがわからなかった生徒の増加は、トピックが難しかったことによるものかもしれない。時間内に読み切れなかった生徒は減少し、概要・要点などをとらえる読み方に少し慣れたことがうかがえる。しかしこのデータには、進路決定者で早々にテストに真剣に取り組むことをやめてしまった生徒も含まれている。時期にかかわらず、すべての生徒が価値を見出せる授業にしていく必要がある。

### **教師の変化**

- ・読解タスクを工夫するためにより深い教科書の読み込みが必要になり、教材研究に楽しさを感じるようになった。
- ・定期テストの初見の実力問題に、より多くの要点や概要を問う問題を設定するようになった。
- ・日常的な話し合いやハンドアウトの輪番作成、共通の読解タスクの実施などにより、今まで以上に同僚たちと密に連携を図れるようになった。

### **今後の課題（次の改善点など）**

- ・概要等を自分のことば（日本語）でまとめることに難しさを感じる生徒が多かったため、授業中の小さなやり取りなどのなかでも自分のことばで理解し表現する練習を積み上げていきたい。
- ・2学期になると、一部の進路決定者に授業への意欲的な取組が見られなくなった。英語を学ぶ意義を理解させ、卒業後の英語を使う場面を意識させながら、学習動機を高める工夫が必要である。
- ・一般受験をする生徒のなかに、授業でやる英語と受験に必要な英語は別であると誤解しており、授業の活動に取り組まなくなった者がいた。日々の授業の積み重ねが受験にも役立つということを十分に理解させられる授業づくりが急務である。
- ・スキルの育成とそれを支える語彙文法の定着、論理的思考力の涵養を目指した指導計画を、1年次からしっかりと立てる必要がある。

### **まとめ・感想**

この研修の前までは、「楽しい授業」を行うことに努めながらも、「本当に生徒の英語力が育っているのか」と悩んでいた。しかし、研修を受け、当たり前に行っていることを見直してみることの大切さに気づくことができた。高校の英語授業は読解が中心で、プレ／ポストリーディングの活動として他技能がかかわることが多いだろう。そこであらためてリーディングの重要性を意識させながら授業改善に取り組んできた。十分に読解力を向上させるまでには至らなかったが、同じ目標を共有し、一緒に授業改善に取り組んでくれた同僚たちとの結束をより深めることができた。学校全体として生徒の英語力を高めるためには、教員同士のチームワークが必要不可欠であるということあらためて実感した。今後も日々の授業に目的意識をつねに持ち、生徒の成長に貢献できる教師を目指して一層努力していきたい。

## よりの確で深い読みを促す読解指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	---------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は1年生3クラス120名（男子52名，女子68名）の生徒である。全体的に学習意欲は高いが，問いかけに対し一部の生徒しか反応しないこともある。英語が得意な生徒も多い一方，長文読解に不安を感じている生徒もいる。ほとんどの生徒が4年制大学に進学し，難関大学を目指す者も多い。

### 解決すべき課題

日本語を介さずに，初見のまとまった英文を抵抗なく読めるようになることを目標としている。しかし，一つひとつの単語の意味や1文1文の日本語訳がわからないと不安になり，辞書等で調べながら読むため，英文全体の概要や要点を把握するのに時間がかかることが多い。本文に関する簡単な問題は答えることができるが，内容について深く考える問題ができなかったり，自分の意見を述べることができなかったりする者もいる。

### 事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・英検 IBA によるレベル判定（受験者数 118）＊人数(%)

英検 IBA テスト B（英検 2 級～3 級レベル）で，生徒のおおよその英検レベルを判定した。この結果から，読解力の指標として 2 級の長文問題を使用することにした。

2 級	準 2 級	3 級
40(33.9)	77(65.3)	1(0.8)

- ・第 1 回 読解力テスト（7 月実施：受験者数 115）

英検 2 級の長文問題の最後の 1 問を独自の概要問題に差し替え，合計 5 問のテストを行った。

平均点	最高点	最低点	7 割以上正解
3.78 点	5 点	0 点	74 名(64.3%)

設問ごとの正答率 ＊人数(%)

1	2	3	4	5(概要)
104(90.4)	104(90.4)	93(80.9)	76(66.1)	58(50.4)

- ・第 1 回 読解に関するアンケート調査

英検長文テスト実施後に，自分自身の読解の課題についてたずねた。（回答者数 115）＊人数(%)

1. 一番難しかった点は何ですか。

語彙	文法	概要把握	読むスピード	特になし
85(73.9)	4(3.5)	16(13.9)	8(7.0)	2(1.7)

2. 問題を解くうえで、今の自分に一番必要な力は何だと思いますか。

語彙	文法	概要把握	読むスピード	特になし
99(86.1)	5(4.3)	11(9.6)	0(0.0)	0(0.0)

#### <分析・考察>

テストでは概要把握問題の正答率が他の問題に比べて低く、英文全体のメインアイディアをとらえる力がやや弱いことが推察された。アンケートでは、読解の困難点、読解に必要な力の両方で「語彙」を挙げる生徒が際立って多かった。全体として、一つひとつの単語や1文1文の意味理解に注意が向いていることがうかがえた。

### リサーチ・クエスチョン

初見の英文を、日本語を介さずに主体的に読んで、内容を深く理解する力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：

- ・初見の英文に取り組み、読解力があがったと感じる生徒が全体の7割以上になる。
- ・英検2級の読解問題で正答率7割以上の生徒が全体8割以上になる。

### 改善のための手だて

- 英文のメインアイディアやメインメッセージを読み取るタスクを与えて読解に取り組ませれば、細部にこだわらずに概要や要点を把握できるようになるだろう。
  - ・辞書等を使わずに本文を読ませ、グラフィックオーガナイザーなどに取り組ませる。
  - ・教科書本文の各パートのメインアイディアをとらえたり、自分でまとめたりする活動を行う。
- 教科書英文の内容について、書いたり話したりするポストリーディング活動を与えれば、より主体的な読みと深い理解を促すことができるだろう。
  - ・ペアワーク、グループワークで本文のテーマにもとづいた話し合いをさせる。
  - ・各レッスンの読解後、自分でグラフィックオーガナイザーを作成させる。
  - ・教科書で学んだ内容についてリテリングやグループプレゼンテーションをさせる。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回 読解力テスト（12月実施：受験者数118）

第1回と同様に、英検2級の長文問題（合計5問：1問は独自の概要問題）でテストを行った。

平均点	最高点	最低点	7割以上正解
3.81点	5点	1点	74名(62.7%)

設問ごとの正答率\*人数(%)

1	2	3	4	5(概要)
86 (72.9)	114(96.6)	78(66.1)	83(70.3)	88(74.6)

・第2回 読解に関するアンケート調査 (回答者数 118)

テスト後に前回と同様のアンケートを行った。 \*人数(%)

1. 一番難しかった点は何ですか。

語彙	文法	概要把握	読むスピード	特になし
71(60.2)	2(1.7)	17(14.4)	21(17.8)	7(5.9)

2. 問題を解くうえで、今の自分に一番必要な力は何だと思いますか。

語彙	文法	概要把握	読むスピード	特になし
91(77.1)	4(3.4)	23(19.5)	0(0.0)	0(0.0)

3. 授業中の活動で読解力を伸ばすのに一番役に立ったと思うものはどれですか。

内容に関する Q&A	グラフィック オーガナイザー の空所補充	グラフィック オーガナイザー の自作	リテリング (Post-reading)	その他
54(45.8)	15(12.7)	6(5.1)	16(13.6)	27(22.9)

その他：単語集を使った小テスト、レッスンごとの語彙リスト

4. 初見の英文に取り組み、読解力が上がったと感じますか。

はい	いいえ
66(55.9)	52(44.1)

<分析・考察>

- ・読解力テストでは、改善の目安（7割以上正解する生徒の割合が8割以上）には達しなかった。微増している平均についても統計学的な有意差は認められなかった（ $t$ 検定： $p=0.94 > 0.05$ ）。読解活動の工夫はしてきたつもりだったが、「どのように読むか」という読解ストラテジーの指導が不十分だったと思う。そのなかでも、概要把握問題の正答率がかなり向上したのは、グラフィックオーガナイザーによる読解活動の成果かもしれない。
- ・アンケートでは、難しかった点として「読むスピード」を挙げる者が7.3%から20%以上へ大きく増えた。内容をより深く読み取ろうとして時間の不足を感じたのかもしれない。必要な力としては、「概要把握」の割合が増えている。授業中の読解タスクによって、その重要性を以前より意識するようになったのではないかと思われる。
- ・読解力向上に役立ったと思う活動を問うアンケートでは、複数回答可にしなかったため、比較的易しいQ&Aを選択する生徒が多かったが、自分のことばで内容を整理させることで、生徒の理解度が教師も確認できる、グラフィックオーガナイザーの活動は継続していきたい。
- ・半数以上の生徒が初見英文の読解力が上がったと感じているが、目標（7割）には届かなかった。テスト結果を反映していると考えられるが、授業の活動でも達成感を与えられるようにしたいと思った。
- ・前期の途中までは授業に対し比較的受け身で、英文を読み問題を解くことが中心になったり、自

分の意見が言えなかつたりしていた。しかし、日本語を介さない授業に慣れるとともに、パラフレーズをする際自分なりの工夫をしたり、ポストリーディング活動では自分の意見を述べたりと、主体的に英文を読むとする生徒が増えたように感じる。また、ペアワークやグループワークを適宜取り入れることにより、英語の発話機会も増やすことができた。

## **教師の変化**

- ・年度初めに学年の英語科として大まかな目標を定めてはいたが、データに基づいた具体的な目標にすることにより、やるべきことが明確になり、新しいことにも目的を持って取り組めるようになった
- ・研修で得た知見を同僚とシェアしながら、協力して指導計画や教材作成をすることができるようになった。新しい活動や指導法を積極的に導入する雰囲気も出てきて、活発に意見交換もできるようになった。

## **今後の課題（次の改善点など）**

今後も生徒のニーズの把握をし、適切な課題設定をしていきたい。生徒が本当に理解できているかどうかを確認するためのアンケート調査なども継続して定期的に行う必要がある。授業のなかでは内容理解を深めるためのポストリーディング活動を充実させ、生徒が自己発信できる機会をさらに増やしていきたい。また、今後も生徒の英語力にかかわるデータについては丁寧に分析をし、的確な授業改善に活かせるようにしていきたいと思う。

## **まとめ・感想**

今回のアクション・リサーチはこれまでの自分の試みやその成果と向き合うきっかけとなった。生徒の英語力を伸ばすことができているのか不安になることが多かったが、講義や研究授業を通して、自分ができていないところにしっかりと向き合い、改善点を見つけ、新たな試みを行うことができるとてもよい機会を持てたと思う。授業では生徒たちは全体的によくできるため、これまでは振り返ることなく進めてしまっていたが、本当に生徒は理解できているのか、授業でやっていることは効果的なのか、またそれらの課題に対し何をすればよいのか、などを考える機会となった。

またそのなかで、生徒を信じることの大切さにも気づかされた。授業の進め方の変化にしっかりと対応し、教師としての新たな発見や達成感を与えてくれた彼らにあらためて感謝している。熱心に英語学習に取り組む生徒の気持ちに応えられるような授業をしていきたい。また、同じ志を持つ受講者の先生方からも、多くの授業改善のヒントや励ましをいただいた。この研修が、新たな挑戦への後押しをしてくれたと思う。研修最終回で「英語の教員として自覚を持ち、勉強を続けてください」と言われたことが心に残っている。今回の研究で終わりにせず、今後も、授業改善や自己研さんを続けていきたい。

## **授業改善にあたって参考にした資料等**

門田修平他(編著). (2010). 『英語リーディング指導ハンドブック』 大修館書店

## 大学入試レベルの英文を読解する力を伸ばす指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象クラスは1クラス合計40名(男子23名、女子17名)の生徒である。素直で優しい生徒が多く明るい雰囲気のクラスである。英語に対して苦手な意識を持つ生徒もいるが、自発的に英語学習に取り組む生徒が多い。講義型の授業では集中が続かないが、音読やスピーキング活動では声をしっかり出して取り組む生徒たちである。卒業後はほぼ全員が上級学校へ進学することを考えている。

### 解決すべき課題

大学入試を目指した学習を進めるなかで、模擬試験等における長文読解を苦手とする生徒が多く、概要や要点を把握しながら英文を読み進める力が育っていない。高いレベルの上級学校へ進学するためには、初見の英文を的確に読み解き、設問に対して正確に解答することが求められるが、そのために必要な基礎的リーディングスキルが不足しているのが現状である。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

・第1回 授業アンケート（5月実施：回答者数39）

1. この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか？2つ選んでください。

英語を聞く力	英語を話す力	英語を読む力	英語を書く力	語彙の知識	文法知識
15名(38.5%)	18名(46.2%)	16名(41.0%)	5名(12.8%)	8名(20.5%)	10名(25.6%)

2. あなたは長めの英文を読解することが得意だと思いますか。

まあまあ得意だと思う	どちらかといえば得意だと思う	どちらかといえば不得意だと思う	不得意だと思う
3名(7.7%)	7名(17.9%)	10名(25.6%)	18名(46.2%)

3. あなたにとって英文読解の一番大きな課題は何ですか。

大意や要点をとらえることが難しい	読み進めるスピードが遅い	単語・イディオムの知識不足で読み進められない	構文の知識不足で文の意味が取れない
6名(15.4%)	8名(20.5%)	28名(71.8%)	2名(5.1%)

#### <分析と考察>

\*46.2%の生徒が英語を話せるようになりたいと答えていると同時に41.0%の生徒が英語を読む力を伸ばしたいと答えている。話せるようになりたいという欲求とともに、進学を含めた将来に向けて英文を読む力の必要性を感じているのではないかと考えられる。

\*長文読解については71.8%の生徒が苦手意識を持っており、その原因として単語やイディオムの知識不足を挙げている生徒も71.8%いた。本校では1週間に1度、英単語・熟語テストを実施してお



り2年生はすでに指定の単語集を最後まで一通り学習しているはずなのだが、その定着が図られていないのが原因のひとつと考えられる。

・第1回 センター試験長文読解問題の正答率調査（8月実施：対象者数40）

過去のセンター追試験の第6問を使って生徒の読解力を調べた。（36点満点）

人数	平均値（正答率）	標準偏差	最大値	最小値
40	11.85 (32.9%)	8.85	30	0

<分析と考察>

- \*全体の正答率が32.9%にとどまり、9名の生徒が0点であったこと、および満点取得者がいなかったことから、総じてセンターレベルの長文を読むために必要な基礎的なスキルが身につけていない現状が見受けられた。
- \*生徒の感想として、単語が難しく内容を理解できなかったとの回等が多かった。語彙力不足が英文理解を阻んでいることは予想されるが、それと同時に語彙以外の英文読解に必要なスキルについても認識が不足していることも考えられる。
- \*特に、問題Bは各パラグラフの要点と論理展開を問う問題だが、正解者はわずか10名であった。各パラグラフのトピックを理解するという基本的な読み方ができていない生徒が多いことがわかった。想像以上に平均値が低く、読解力の伸長が急務と考えられた。

**リサーチ・クエスチョン**

初見の大学入試レベルの長文を的確に内容理解できる力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：センター追試験過去問の第6問における正答率が60%以上になる。

**改善のための手だて**

- 語彙学習の工夫の仕方を指導すれば語彙知識が増えるとともに未知語の推測もできるようになるだろう。
  - ・ 文脈、使用例、絵での提示を通じて語彙と意味を考えさせ、記憶に残るよう工夫する。
  - ・ 派生語、類義語、関連語を提示し語彙知識を増やす。
- 英文の論理構造や読解のストラテジーを明示的に指導し、さまざまな読解タスクを与えれば、的確に内容を理解できるようになるだろう。
  - ・ ディスコースマーカー、パラグラフのトピック理解などの読解ストラテジー指導を行う。
  - ・ 初見の教材を与え、くり返し読解演習を行う。
  - ・ 音読、ペアワーク、グループディスカッション、ディクテーションなど言語活動を工夫する。
  - ・ 英文の内容に関連した時事、社会、科学的知識などを提供し内容スキーマの拡大を促す。

## 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

### ・語彙指導への反応

\*発表語彙と受容語彙の区別をし、重点的に指導する語彙を絞ることで、語彙指導にメリハリが生まれ、派生語や類義語などを学ぶ時間が増え、生徒たちの興味関心が高まったと感じている。また、生徒の目を引くような写真を活用することで以前に比べ興味を持って取り組むようになった。

### ・長文読解タスクの取組状況

\*4人グループの各生徒に1～4の番号を与え、教師の発問に対し指定された番号の生徒たちだけが答えられるといった協同学習の一手法(Numbered Heads Together)を取り入れたところ、読解への意欲も高まり以前よりも授業に積極的に取り組むようになった。

### ・第2回 授業アンケート（12月実施：回答者数40）

1. この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか？2つ選んでください。

英語を聞く力	英語を話す力	英語を読む力	英語を書く力	語彙の知識	文法知識
15名(37.5%)	18名(45.0%)	16名(40.0%)	10名(25.0%)	4名(10.0%)	10名(25.0%)

2. あなたは長めの英文を読解することが得意だと思いますか。

まあまあ得意だと思う	どちらかといえば得意だと思う	どちらかといえば不得意だと思う	不得意だと思う
4名(10.0%)	10名(25.0%)	17名(42.5%)	9名(22.5%)

3. あなたにとって英文読解の一番大きな課題は何ですか。

大意や要点をとらえることが難しい	読み進めるスピードが遅い	単語・イディオムの知識不足で読み進められない	構文の知識不足で文の意味が取れない
6名(15.0%)	7名(17.5%)	20名(50.0%)	8名(20.0%)

### <分析と考察>

\*長文読解に対して「不得意だと思う」が23.7%減少し、「どちらかといえば不得意だと思う」が16.9%増加している点から一定程度苦手意識が緩和されたと考えられる。

\*伸ばしたい力で「語彙の知識」を挙げた生徒が10.5%減少した点と英文読解の一番大きな課題として「単語・イディオムの知識不足」を挙げた生徒が21.8%減少した点から、手だての効果がある程度は表れたと考えられる。

\*「構文の知識不足で文の意味が取れない」ことを課題として挙げた生徒が14.9%増加したことから、生徒が苦手とする文構造を分析し、適切な指導の工夫を検討したい。

### ・第2回 センター試験長文読解問題の正答率調査(12月実施：対象者数40)

再度、過去のセンター追試験の第6問を使って生徒の読解力を調べた。(36点満点)

人数	平均値(正答率)	標準偏差	最大値	最小値
40	19.8(55.0%)	9.02	36	0

### <分析と考察>

\*改善の目安である正答率60%には届かなかったものの、正答率が22.1%上昇した点については一定の成果があったのではないかと考えられる。

\*得点の伸び率(第1回・第2回調査の得点差)が66.7%上昇した生徒が6名、正答率が6割を超えた

生徒がクラスの約半数（21名）いたことから読解力が向上傾向にあるといえる。

\*生徒の感想の中には、「8月よりすごく読めた!」「読む力がついたと感じた!」というコメントもあり、点数が向上した生徒については実感の伴う結果となった。

## **教師の変化**

- ・リーディングストラテジーの指導を行うようになったことで、英文自体の構成やトピックセンテンスを中心としたアウトラインを教師自身がまず深くとらえる教材研究を行うようになった。
- ・以前はこの生徒にはこのくらいの質と量が必要であろうというある種の思い込みに基づいて教材を作成していたが、生徒に直接教材や授業の進め方などについての意見や感想を聞くことで、生徒のニーズに合わせた教材を作成するようになった。
- ・Numbered Heads Together やグループ間の競争を生むような仕掛けを授業に施すことによって授業進行のリズムが生まれ、テンポよく授業を展開できるようになり、英語を教えていて楽しいという思いがより一層強くなった。

## **今後の課題（次の改善点など）**

- ・語彙指導については、より使用頻度や汎用性の高いものを精選するなど、生徒にとってより実利的で興味深い学習になるよう工夫しなくてはならないと感じている。
- ・ペアワークやグループワークは必ずしも全員が活発に取り組むということにはなかった。生徒同士の人間関係を配慮したグループ作りや、単なる隣り同士ではなく生徒が組みたい相手とペアワークを行う手法(バディ制)を導入したりするなど、さらに工夫が必要であると感じている。
- ・同じタスクを毎時行くと飽きる生徒もいるため、授業の流れを大きく変えないまま、さまざまなタスクにひと工夫加えるなど、生徒を飽きさせない手だてが必要であると考ええる。
- ・授業時間の多くを読解に割いているため、リスニング、スピーキング、ライティングを含めた統合的リーディング活動をより積極的に取り入れる必要がある。

## **まとめ・感想**

着任したばかりで生徒像がとらえられず、どのように授業を行えばよいか試行錯誤をくり返していたなかで今回の研修を受けたことは大きな支えになった。アドバンス研修では毎回新しい発見があり、それらをふんだんに授業に取り入れていき改善を図ることができた。当初、講義形式で行っていた長文読解指導では、想像以上に生徒の集中が続かないことがあったが、研修で学んだタスクを授業に取り入れることで生徒の授業に臨む態度が徐々に前向きになる様子が見て取れた。また、計画的に目的意識を持って指導を行うとしっかりと結果や数字にも表れるものだと、研究活動を通じて実感できた。今後もつねに生徒の声に耳を傾け、彼らにとってどのような授業が必要なのかという問いを持ち続け研さんに励みたい。そして、より質の高い指導ができるよう成長していきたい。

## **授業改善にあたって参考にした資料等**

卯城祐司. (2009). 『英語リーディングの科学』 研究社

鈴木寿一・門田修平. (2014). 『英語音読指導バンドブック』 大修館書店

## パラグラフリーディングのスキルを育てる読解指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は1クラス40名（男子24名，女子16名）の生徒である。明るく活発で，積極的に発言をしようとする生徒がおり，クラスの雰囲気は良好である。国公立・私立の最上位校に進学しようという生徒が多く，学習に対する意欲は高いが，部活や委員会活動，学校行事と学習の両立に悩んでいる生徒も多いようである。

### 解決すべき課題

- ・英文1文1文の意味や段落のなかでの働き（主張，理由，具体例など）を正確に理解する力が十分に身につけていない。
- ・まとまった文章を読むときに，各段落の要点，全体の概要，論理構成などを読み解く力が十分に身につけていない。

### 事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第1回 英語授業にかかわるアンケート（7月実施：回答者数39）

生徒の英文読解についての認識を，以下の4つの項目に分け，アンケートで調べた。

1. 1文1文を正確に読解する力が身につけていると思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
3人（7.7%）	20人（51.3%）	12人（30.8%）	4人（10.3%）

2. 段落ごとの要点（大切な箇所）をとらえる力が身につけていると思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
3人（7.7%）	20人（51.3%）	15人（38.5%）	1人（2.6%）

3. 構成（序論・本論・結論など）や段落の関係をとりえる力が身につけていると思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
3人（7.7%）	18人（46.2%）	17人（43.6%）	1人（2.6%）

4. 全体の概要（筆者の主張やメインアイデア）をとらえる力が身につけていると思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
5人（12.8%）	23人（59.0%）	10人（25.6%）	1人（2.6%）

概要理解の力については7割以上の生徒が「身につけている」と自己評価をしているが、その他の力については4割以上の生徒が「身につけていない」と感じていることがわかった。特に、文章構成についてはもっとも多い46.2%の生徒が十分に読み取れていないと認識していた。

・第1回 センター試験第6問に挑戦！（7月実施：対象者数36）

段落ごとの要点や、文章構成と概要を読み解く力が、どれくらい身につけているかを調べるために、大学入試センター試験の筆記問題の第6問（36点満点 各6点）を出題した（解答時間15分）。目標として、多くの生徒に必要な8割以上の正答率（30点以上）を設定した。合計点の分析とは別に、概要問題（問題A-問5）の正答率と、要点および段落構成を問う問題（問題B）の正答率をそれぞれ算出した。

平均点	最高点	最低点	8割以上正解
20.3点	36点	0点	8人（22.2%）

問題A-問5	問題B
79.4%	58.3%

全問の正答率が8割以上だった生徒は22.2%と少なかった。また1文1文を読み解くことにこだわるあまり、解答に時間がかかる生徒がややいたようだった。

定期テストではおもに、既習の英文の文構造の理解を問う問題や部分和訳を出題しており、そこで高得点を取れる生徒が、初見の英文の概要や要点を読み取れているとは限らないということがあらためてわかった。初見の英文にも応用できる、本来的な読解力が身につくような授業をしなければならぬと感じた。

**リサーチ・クエスチョン**

英文の概要・要点や論理構成を的確に把握する力を身につけさせるには、どのような指導をすればよいか。

- ・改善の目安：大学入試センター試験第6問（長文読解問題）で8割以上正答できる生徒が全体の6割以上になる。

**改善のための手だて**

- 精読指導に加えて、段落構造や文章構成の指導と練習をくり返し行えば、英文内容の流れを的確に読み取る力が身につくだろう。
  - ・序論、本論、結論の構成や、主張、理由、具体例、結論の段落構造を理解させ、習熟させる。
  - ・キーワードやキーセンテンスに着目するなどの読解方略を指導する。
  - ・ハンバーガーの模式図を使って文章構成（序論、本論、結論）の理解を促しながら、段落ごとの要点、英文全体の概要を考えさせる。
  - ・生徒同士で文章構造に関する話し合いのペア・グループ活動を行わせる。
- 初見の英文の概要・要点を読み取る練習を与えれば、自分の力で読解する力が身につくだろう。
  - ・週1回程度、300語から400語程度の英文を読ませ、概要と要点を読み取る訓練をする。

## 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

### ・授業での取組状況

教師主導の説明中心の授業から、協同学習を含めた自力での概要・要点の読解タスク中心の授業にしたことで、より深く自発的に読む姿勢が見られるようになった。11月に練習として行ったセンター試験第6問の長文読解でも、学習した読解方略の効果を確認できていたようだった。

### ・第2回 英語授業にかかわるアンケート（12月実施：回答者数 38）

#### 1. 1文1文を正確に読解する力が身についていると思いますか。

	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
7月	3人 (7.7%)	20人 (51.3%)	12人 (30.8%)	4人 (10.3%)
12月	2人 (5.3%)	25人 (65.8%)	9人 (23.7%)	2人 (5.3%)

#### 2. 段落ごとの要点（大切な箇所）をとらえる力が身についていると思いますか。

	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
7月	3人 (7.7%)	20人 (51.3%)	15人 (38.5%)	1人 (2.6%)
12月	2人 (5.3%)	23人 (60.5%)	11人 (28.9%)	2人 (5.3%)

#### 3. 構成（序論・本論・結論など）や段落の関係をとりえる力が身についていると思いますか。

	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
7月	3人 (7.7%)	18人 (46.2%)	17人 (43.6%)	1人 (2.6%)
12月	3人 (7.9%)	24人 (63.2%)	10人 (26.3%)	1人 (2.6%)

#### 4. 全体の概要（筆者の主張やメインアイデア）をとらえる力が身についていると思いますか。

	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
7月	5人 (12.8%)	23人 (59.0%)	10人 (25.6%)	1人 (2.6%)
12月	5人 (13.2%)	21人 (55.3%)	11人 (28.9%)	1人 (2.6%)

第1回アンケートで課題とした文章の構成をとらえることができるかの質問において、「思う」「どちらかというと思う」と答えた生徒が71.1%（27人）に上昇した。だが、第1回、第2回のデータがそろっている37人のデータの向上について、統計学的検定（Wilcoxonの符号付順位検定）を行ったところ、いずれの項目でも有意差は認めることができなかった（ $p > 0.05$ ）。特に概要理解に対する生徒の達成感をあまり高めることができなかった。

### ・第2回 センター試験第6問に挑戦！（12月実施：受験者数 36）\*実施方式は第1回と同様

	平均点	最高点	最低点	8割以上正解
7月	20.3点	36点	0点	8人 (22.2%)
12月	27.8点	36点	12点	21人 (58.3%)

	問題 A 一問 5	問題 B
7 月	79.4%	58.3%
1 2 月	85.7%	66.7%

正答率 8 割である 30 点以上を取った生徒は 21 人 (58.3%) になり大幅な上昇が見られたものの、あとわずかながら目標に達することはできなかった。受験者全体の平均点は 20.3 点から 27.8 点へと上昇し、個々の生徒の伸びについて  $t$  検定 (対応のあるデータ) を行ったところ、有意差が認められた ( $p=0.00 < 0.05$ )。

設定した目標の達成には至らなかったが、「正答率 8 割以上」は全問正解あるいは誤答 1 問であり、2 年生であることも考慮すれば、ある程度満足できる結果であった。問題 A 一問 5、問題 B ともに正答率が上がっており、生徒がよりの確に文章全体の概要、段落の要点や構成を把握できるようになったと考えられる。しかし、問題 B の正答率は、概要問題に比べると依然として低いため、要点や構成の読解指導をさらに工夫する必要があるだろう。全体的に解答のスピードが上がっており、キーワードや段落構成に関する既習知識を頼りにして、より素早い読解ができるようになったと思われる。

### **教師の変化**

- ・生徒の課題解決に向け、目的を持って毎回の授業をするようになった。そのことで、授業の目標や、生徒が授業中に学ぶべきことが明確になり、授業に対する生徒の満足度を上げることもできた。
- ・以前は一つひとつの英文の精読が授業の中心であったが、文章構成や概要把握の読解活動を導入したことで、よりきめ細かい授業準備をするようになった。

### **今後の課題 (次の改善点など)**

- ・段落ごとの要点を素早くとらえながら読み進める訓練を継続的に行う。
- ・読解を通して身につけた段落構造や文章構成の知識を、アウトプット活動、特にライティング活動で使えるように指導し、難関国公立大学の 2 次試験にも対応できるスキルを育成する。

### **まとめ・感想**

本研究を通して、各段落が果たしている役割や、文章全体の要旨の把握など、より高い次元の読解の重要性に気づかされた。同時に、そのような読解のためには、各文の意味を正確に素早く把握する基礎訓練が重要であるとあらためて感じた。さまざまな試行錯誤をしながらの授業も多かったと思うが、生徒はよくついてきてくれたと思う。こちらもそれに応えるために指導力を一層高め、指導方法や言語にかかわる知識を増やす努力を続ける必要があると強く感じた。英語教師として、より高いレベルの英文を正確に理解し、わかりやすく解説できる引き出しを増やす必要が絶対的にある。

最後に、研修を通して知り合うことができた受講者の先生方と高いレベルの講師に感謝を申し上げたい。教育に対する情熱と英語運用能力の高さ、そして英語教育を研究して生徒に対してより効果的な指導方法を見つけようという姿勢に、つねに触発されてきた。この研修に参加することができたことが、2017 年の私にとって、何物にも変えがたい幸運であった。本研修で得た経験を無駄にしないために、絶えず自己研さんに努めたい。

## 読解タスクとプレリーディング活動の改善

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2クラス78名（男子52名，女子26名）の生徒である。2クラスとも全体的に明るく活発な雰囲気、教師の問いかけに対して反応を示す生徒も多い。ホームルームでの必修授業で、習熟度の異なる生徒が混在し、授業に集中できない生徒もいる。大半の生徒は4年制大学への進学を希望している。

### 解決すべき課題

英文を1文ずつ和訳することが読解であると考えている生徒が多く、和訳できない文章に出会うとそのままあきらめてしまいがちである。ほとんどの生徒は教科書の英文を難しいと感じており、積極的に英文読解に取り組もうとする動機づけが必要である。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回授業改善アンケート（6月実施：回答者数74）

生徒の英語学習への意識や英文読解の自己評価に関してアンケートを行った。

1. 英語の学習が好きか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
13人(17.6%)	24人(32.4%)	26人(35.1%)	11人(14.9%)

2. 英語の授業でどのような知識や力を伸ばしたいか。（複数回答可）

聞く力	話す力	読む力	書く力	語彙の知識	文法の知識
31人(41.9%)	35人(47.3%)	39人(52.7%)	31人(41.9%)	21人(28.4%)	22人(29.7%)

3. 英語を読む力は必要だと思うか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
55人(74.3%)	17人(23.0%)	2人(2.7%)	0人(0.0%)

4. 教科書の英文の内容を理解できていると思うか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
9人(12.2%)	34人(45.9%)	24人(32.4%)	7人(9.5%)

5. 英文を読むときにわからない語があっても全体の内容を理解しようとしているか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
23人(31.1%)	36人(48.6%)	11人(14.9%)	4人(5.4%)

6. 英語の授業で英文の概要や要点をとらえる力が身についていると思うか。



そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
6人(8.1%)	33人(44.6%)	25人(33.8%)	10人(13.5%)

<分析と考察>

\*読む力を伸ばしたいと考えている生徒がもっとも多く、英語を読む力は必要であると考えている生徒が97.3%にのぼるが、英語の学習が好きではない生徒は半数にのぼり、意欲的でない生徒も多いとわかった。まず英語に対する興味関心を持たせることが必要であると感じた。

\*教科書の英文を理解できていないと回答した生徒は41.9%であり、20.3%の生徒は英文に未知語があると全体の内容を理解できないという回答であった。英文を読むということが和訳をすることではないということを理解させるべきである。

\*約半数の生徒が授業で英文の概要や要点をとらえる力は身につけていないと回答しており、どのような読解タスクを与えるべきかをあらためて考える必要があると思った。

・第1回英文読解力テスト（6月実施：受験者数73）

英検準2級の長文読解問題に概要を問う自作の設問を追加して使用した（1点×5問）。

	人数	平均値	標準偏差	最大値	最小値
第1回	73	2.6	1.16	5	0

設問ごとの正答率

設問	1	2	3	4	5
正答率 (人数)	84.9% (62人)	27.4% (20人)	34.2% (25人)	54.8% (40人)	52.1% (38人)

<分析と考察>

\*段落ごとに問われる設問については既習の単語が含まれているかいないかによって正答率に差が出た。たとえ未知語があっても英文の内容をとらえる力を育む必要があると感じた。

\*パッセージ全体の概要理解を問う問題と、パラグラフごとの要点理解を問う問題では、正答率に顕著な違いはなかった。

## リサーチ・クエスチョン

英文に興味を持ち、自分の力で英文の概要や要点を読み取れるようにするにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検準2級問題の全体の正答率が7割（平均3.5点/5点）を超える

## 改善のための手だて

- プレリーディングの活動を充実させれば、英文を読むことに対する興味や意欲が高まるだろう。
  - ・ オーラルイントロダクションを導入し、画像や図解などを用いて英文の概要を把握させ、長文に対する抵抗感をなくす。
  - ・ 英文のトピックに関連した身近なことから関するやり取りから、内容に関する興味や関心を持たせる。
- 教科書英文の概要や要点を問う読解タスクを与えれば、自分の力で内容を理解しながら読むことができるようになるだろう。

- ・長文を読むときにパラグラフリーディングを意識させ、段落ごとに重要な情報を読み取らせるタスクを与える。
- ・英文の概要把握を問うタスクや内容全体の理解を確認する T/F 問題などを与え、生徒が英文のメインアイデアや筆者のメッセージを理解できているか確認する。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回英文読解力テスト（12月実施：受験者数 66）

第1回と同様に、英検準2級の長文読解問題（設問5問）を使用した（1点×5問）。

	人数	平均値	標準偏差	最大値	最小値
第2回	66	2.7	1.50	5	0

設問ごとの正答率

設問	1	2	3	4	5
正答率 (人数)	54.5% (36人)	74.2% (49人)	40.9% (27人)	53.0% (35人)	45.5% (30人)

<分析と考察>

- \* 設問の平均正答率は微増し、40%を下回るものはなくなったが、平均点は2.7で改善の目安とした正答率7割（平均3.5点）には達しなかった。
- \* 生徒の取組状況を見ると、早々に読むことをあきらめてしまう者が減り、テスト後に英文の内容に関する質問が出るなど、初めに比べると意欲や興味・関心が高まっていることがうかがえた。

- ・第2回授業改善アンケート（12月実施：回答者数 69）

生徒の英語学習への意識や英文読解の自己評価に関してアンケートを行った。

1. 英語の学習が好きか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
16人(23.2%)	22人(31.9%)	22人(31.9%)	9人(13.0%)

2. 教科書の英文の内容を理解できていると思うか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
9人(13.0%)	38人(55.1%)	16人(23.2%)	6人(8.7%)

3. 英文を読むときにわからない語があっても全体の内容を理解しようとしているか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
18人(26.1%)	41人(59.4%)	4人(5.8%)	6人(8.7%)

4. 英語の授業で英文の概要や要旨をとらえる力が身についていると思うか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
8人(11.6%)	38人(55.0%)	14人(20.3%)	9人(13.0%)

<分析と考察>

- \* 「英語の学習が好き」という生徒は微増にとどまったが、プレリーディングの活動に対する反応や読解タスクへの取組状況はよくなっている。

\*教科書英文の内容を「理解できている」としている生徒は58.1%から68.1%になり、プレリーディング活動から読解タスクに進む指導方法にある程度の効果があったといえるが、約3割の「理解できていない」という生徒たちのためにさらなる工夫が必要である。

\*概要や要点の読解が「身につけている」という生徒は52.7%から66.6%に上がった。未知語にとらわれずに読む姿勢もより多くの生徒に見られ(79.7%→85.5%)、重要事項を素早く読み取ろうという読み方ができるようになってきたと思われるが、3分の1の生徒にはまだその実感がない。今後はさまざまな読解のストラテジー(どのように読むか)の指導を意識的に行う必要がある。

## **教師の変化**

- ・毎回の授業において目的や目標を明確にして活動を行うことにより、生徒に達成感を与えられ、英文を読むことへの動機づけになると実感できた。
- ・オーラルイントロダクションを導入するにあたり、自分自身も教科書のトピックについて深く考え、生徒に考えさせたり話をさせたりするような言語活動を工夫できるようになった。
- ・アンケートの結果などから、生徒のニーズや希望が明確になり、自分の授業の改善点もあらためて浮き彫りになった。

## **今後の課題(次の改善点など)**

- ・読解力テストでは目標値に達しなかったが、これは初見問題に対する練習が足りていなかったからであろう。授業で用いたワークシートのような足場掛けがなくても英文を読むことができるようにする必要がある。
- ・今までは教科書英文の文字通りの意味解釈が授業の中心であったが、英文のトピックに興味関心を持って議論できるような活動を取り入れた授業にしていくべきである。
- ・英文を読むということ自体に苦手意識がある生徒と、深い読みを求めている生徒を飽きさせないことの両立について考えていく必要がある。

## **まとめ・感想**

今回のリサーチを通して、生徒が英語に対して苦手意識を持っていたとしても、できるようになりたいという気持ちはあり、生徒が求めていることに対して適切な教材を与えれば応えてくれ、それが力になっていくということを実感した。今後も生徒の様子をよく見て、何を必要としているかを知り、それに合った目標設定とその達成のための手だてを講じていきたい。

この研修を通して、自分自身がどのような目標を持って教育に携わっていくべきかをあらためて考えさせられた。このような機会を与えていただいたことに感謝している。

## **授業改善にあたって参考にした資料等**

- 門田修平・野呂忠司・氏木道人(編著). (2010). 『英語リーディング指導ハンドブック』 大修館書店  
田中武夫・島田勝正・紺渡弘幸(編著). (2011). 『推論発問を取り入れた英語リーディング指導』 三省堂  
岡田圭子・ブレンダ・ハヤシ・嶋林昭治・江原美明. (2015). 『基礎から学ぶ英語科教育法』 松柏社

平成 29 年度 英語教育アドヴァンスト研修 担当講師 (50 音順)

江原 美明 (えはら よしあき)

グエン, トアー (NGUYEN, Thoa)

パリセ, ピーター (PARISE, Peter)

村越 亮治 (むらこし りょうじ)

---

平成 29 年度 英語教育アドヴァンスト研修  
授業改善プロジェクト 報告書  
ーアクション・リサーチによる高等学校英語授業の実践ー

発行日 平成 30 年 3 月 31 日

編集 神奈川県立国際言語文化アカデミア  
(担当) 村越 亮治 江原 美明

発行 神奈川県立国際言語文化アカデミア  
横浜市栄区小菅ヶ谷 1 丁目 2-1  
TEL 045(896)1091

---